古寅今抱說

全

1.088

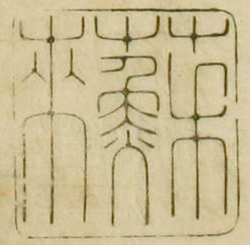
門 ヘ/一13
番 1088
巻 1-2

序

四海太平の代と云中。なけて元朝の仏持。幾度吟て義
仏より紀禍神双六太夢何なり鄰の始子太書合ての。一粒
明れば娠よと毬をつくも実もむと共に心は浮立といまだ
鍾室に外へは出られぞ。耳斗に先正月をさせんと巨燵
有腰をあづまなぐら清く〳〵吟て居に何か語先を語
る思ふなれど。亦まんざらないまでもあまんと思ふ所
清め。書肆太蔵の偶など弱なく。過去つまし都
人達の吟清さ人をかぶると。志きりに床舗をつく
と枕をともこそるうち。なじ見ふはあし稱ども。後に

見てゐる者和尚忽然と来りたるを。至幸と尋ねし
かば。ほゝりくと答へらるゝ。是は西国ひとおもひ。一ゝ
ゝはほしまつて見ゆれば和尚はまへぞハテ今を家に
と枕をあげれば。寶祝に忽こく笑て居らるゝ袋
和尚なり是は奇なりとおもふりつけ家に堂
残を而已

清涼井



臺嗅古寶今物語巻之一

松前長吉清が事の始

もかふ遊郭は長吉清志やないか。鉄炮かけいで小紹光
浅さして。何所へ遊ると問されば雉子のお山へ雉子打
ゝ。きじはりゝくほろゝうほ。よつてお菓海いれ新茶浅
まいれ。お茶も新茶も呑とふもないが。変な小姫よちよ
とあるとと。此嗅の元をゑづぬれば。長吉清と云ちの
ぬしぎ奴男有。吉徳代をてちやして嗅ふ奴べし是もむ
りしれを奴とや。奥羽にて伊出の何家と申方二万石
を領しあふ吉家士松前長吉和とて陸奥恒き侍なりける

が。対一右衛門深く親に孝行。其仙から下を向と進ぜ。おりて
柔和にして万人に覺敬を持。男姫を能仙に向くまで強に
して。思慮厚く武藝かけ事和すき男なり。其日は鉄砲の上
手にて。主君佐に召連れられ山にて鳥獣を打せて殿御ふ
事もあり。又仰付られて一人行て打ても有。此殿雉子を
好せられて。度々其家に仰て打せ御ふ。所分に雉子多く
集る山にて。佐人のお入を停御へば。おのつと見れ雉子の
此お山といへり。其家情男女多人を仕ふといへた。右母に孝
行なる者。山に居る時も人をつ進ぜ。其に手ぜら鉄砲をか
さげて行なり。夜に笹藤喜安とて。貧医にて行なが。彼山り

業にことを知てひ持りに行て業を堀居る事。いか故に去の
約束にや。其家も其日雉子を打にいたり。たるかに二町
程を隔て見れたるに。黄色成る赤きを御じへ。浅ぎくの衣
類を着て。あでありふしなる処。雉子此二三羽集里居たる体
にみへ。彼に人入置き山なら祢ば。人なりといおりひもなら
ぬ。只一下打に教例へ来て大に驚。仙に思ふよふ。是たからざる
事なれた我誤なり。此吉の妻子をべし。此を試ばさこ
そ口惜く歌を付んとおりふなりん。家母。人に教さ進ぬ。
あとひあやまちにもせよ。金物深ゆるをまじ。たあれは人
もおなじと。不論此死骸を里へ持行。其妻子を取祢歌を

紂なべし。家令も今日をの約束ならんと。兄悟きもあ。す
くに死骸を引かさげしが。待テ志げし。家一人を使に志むふ
母。我死を准りたごくみならん。其之今日を家令を准
なぎしは皆主君の恩。むまを日くのなを公を川とむると見た。
兄金くは為斗に下しある和行にはたべらず。まさうの時
の内大半にも立ん為にて。先祖より祿をする処。なもなく
家死せば。不忠と云不孝と云。一トかたなら恩大半の命。い
かゞはせんとさつておいたは。此業に狗をいあめるが。急度分
別して死骸にむかひ。内身不運にしく家に報されむふ
さうを其会ならん。家又内身の業子に敵を討ひし。去な

から。我主君に一ツ乃大儀をつと免。其上むかの身まかり
あふを待てあるべし。吏をは内身が業子にならば。是を弱祿
ていふなり育ならんと。生るなるに云ごとく恐ふことなりて。ゑ
へ故所を深く堀。死骸を埋む。そかる市狗立て吹りけり。扨
翌日より仏鉄付て町く在くを窺ふに。四五日を經て。そ
んだる吏なる所の醫者。天狗に洗うまれしや。四五日以前に
出て行かた知也を。近所の者たはる方に弱祿しかど。死
骸さへ見へず。其業子のなげき不便のことなり抔と云風
吹を聞。余所ながら見てゐれば。波山の葉より四五町にあた
故。寵といへる町のたはれそ。無藪恵安と云醫者へ。其を清

此所に弱いたり。何けなかなかこの火をもらい休ミ居ミ。
内の粮子銭ハれハ。ミさや弱ニして。僧探拓ド追着せる
神なり。む百仕とてもなく。女房と見へて四十斗。娘と見
へて十四六歳が。女人共に同銭従ちらし居たり。此ありさ夜
をこそハ身も老もあらせず。家社敵なりと名乗て討せ
んと。多度百度おりひしかど。急度心を乱出し。和と乱去
て後里。史より所用で維子ハ知る日ハなを更。兆番の
時も維子にかこつけ。彼の家の前を通り。急度毎に立寄
て休ミ居る。粮子不審におもひ。如何歳方ぞと弱ける
時。家ハ尚朋主の家来歳が。所用にて毎日維子をおに

行者なりとて。史より心安くなり。或時ハ兄にて能業を賛
てたまられとて。銀壹包銭送り。又其時ハ酒を調てたま
られとて。金子銭送り。確に付こに法け金銀を送られば。
兄にて粮子奥若を助かり然。去にても毋税不審し何の
指さるゆしなきに。ならハに金銀をたまはるゆ。いかなるゆ
やと。法くくさひ出し。扨ハ娘に執心にてのゆなべしと。
心の付しもむなり。娘も又長三情が男付きつとして罪
歳同此内に心後里。度毎ならびこれ同法ひ。志に所毋も大
方言辺て。扨ハおもひ合さるなり。何もれ所もがねむす
びをもさせんと常くさひ居たり。長三情ハ唯奥若銭を

くひたごくむ為斗まれば。もじ先の徑社志こしく如らん
為。日をくに立なて。呑こくない酒を呑。喰こくない菜漬
をらいられた。今ハ心あくなりしとなれば。さのゝ毎日行
あも及ぢず。折ふし通る時もよらぬに。もぐ通りをおそ
ゐられハ。毋おりに相扱ハあれ徑に情ふかく志あるまれ
ば。こなたよりも云出すべき筈なるに。もらハ情あくて其
こと云ずに打通ると思ひあふ故。をざうりあふ拙なら先
と。心まゝり娘あもそよし語りて。かさ祢て通る時。其云
清度よりたまへ。只今能茶代賞こう。呑ゐへと呼かけれ
ば。長三朱今日ハたとおそく出。急ぎ見ハ家べからぬ。菓も

而望みましと云られた。連てと云て呼入。所身も家娘ハ
心ありや。娘も又所身を志こふなり。包ぞと申あへと云
られば。長三湯心に葉れこそおりひ。恋にてこそ彼を業
と定ば。あ人をたごくむにたよりよしと思栗して色ゆ
にくゝ恥しく御語とも。いはぞやちよと見しよう。其ゞ語
ふ恋もびゆと云へば。毋ならハも有社思ひ得る故かく申
なり。見あふ通の親子の身分。所身が相ある器量貴柄錯
迄ある人ハ娘松にハ通るまゝ。此方からも望おりふなり
有がらば晩にかあらぬ。来あへ。是鼓さをべしと約束して
お出恩。是をや家をお菓まいれ。形菓代まいれ。お菓も形

菓も香ともないが。こゝに娘にちよとかはさと云なるべし。
ちよとかはさるにはあらず。ちよとうて惚たと云す
なり。一寸惚れさは大事もないが。暁に出離れや長ゝ出
とは。此時の約束なり。かくて長ゝ情やむことなし祢は其
夜来りの事に。娘も又意より仕度して。今宵は暁と
糀ひかざり。元よりきまりもよく御のとり志にして。
今年十六歳。御に蒼の花開け時とや云べき。母もうつこび
盃そこくにさせて。字を通し。西文の一号へ這入て庶れ
ば。こなたは東枕に密明んとする時。長ゝ情思ふ様。此娘
の為に我は全く歌なり。いかに志らざれたとて。現在の歌

に肌奴出んおや。其上後日に我は歌なりと名楽付出ん
時。なさけに知られ付らぬる事もやるべし。只書人為の
史奴なれば。偽には志かずと思ひ。今宵家来る事。此身が
母の詞ゆゑことなく来りぬれた。我心親乃事をて志がら
く身は清く志むなり。去ながら此身は妻なり。母は志らとめ
なれば。字をきゝ志さ清ふな。家心安くそごすべし。情の知は
心親満親と行すへと云れば。お松もちからなく。其夜はむ
なしく別出ぬ。史より長ゝ情は弥青に使よく。家身を
不自由しかの及程に支人は其とくみけり。又其事も実
母に差引ぬことは云に及ず危角する内に光陰帰り安く

既に二年を経たり。月に三又度は姑の手おかれば来りて泊ると以ども。一度も肌をぬれど。手度毎に女房お松いまだ新宅はいえてゆるずや。精進も中落とするゆゑや杯と猶のゆうち手を指込。一ト夜も泊くに寝せざるも却此ちのもう傍が志んぶり。もひきらく斗なり。時々もう傍実母より和歌病年におかされ醫療志るしなく。此家の為も例ちなれど。大るにうけ女抱そといへた定業にてやきかん経に実変なりなれば。もう来天にさけび地に倒れて。意慕沸騰されたる。又久るべきなりもあり。孫は幸に送りて其外の煙となし。中陰のつと先熊熊叮寧敬とす

云もさらなり既に百ヶ日も経れば。仏に思ふ極家維子の山にて教せし人へ此約束一ト夜は満ぬり。此上は主君の御用何を大切成事なれば。身に悪せざることなりとも一命にうけて是我つと先。手上にていさぎよく親子此者に討出んと。若く覚悟極めしは。又きまじき士なりたるに猶も経れば。女人の若家方へ引とり他事なく志しくしみ。是よりはすを云ふは仕らく。家親皇はこつると以た。毎此一周忌過るをいとして。不便やお松生後家といはるべし。今年もう傍は三お松十八才おりて向は能夫婦にして。内證はあぢなりの。和孫見ないとて親迎する毎祝此



ゐも志らぬゝ伴なり。夜ゝおりしきてゐる。長三郎百姓の男
六助。片邊ゟより釣糸ゝ垂るが。抱玄ゟつゝか姫を手の
どくがり。お雲ちいねいゝ殺へられば。正直ゝ笑くて。他のく
へのゝき清へなく。めつたゝ主人を叮嚀ゝ云られば。長三郎兄
我等て或時小うげへ呼ぶ。汝が詞ていねいなりといへども。
不我志らぬと云ものなり。熱て他の人ゝ向ては。家主人が
ば引下て云りのぞ。もとへば他志て粗ませう。今時も長三郎
糸りましたといく。或はむかいゝ行ては長三郎兄ゝ居ます
なら。むかいゝ糸ましたと。伝達ぜられ下さりませと云りの
なり。又は手前へ人来る時し。長三郎居お宿ゝうと云ひて。



宿よりいそぎます。又爰よりおくれときいて出ましてハ間もなくでハござりますと。答へれバ大法。油がよふあいたお前をおいそぎなされますと。そゝのふいからばし。起さい者共おでい。我主人をそんざいにそゝのかすとハ。ふてきやつ。きやつを取てちぎり殺せ。いちがいに斬たゝき。打首高札中よ。横田伴内とて。一家老職の内に有て。おのれが無法なるを意見と云ひ。かへつて我主人を

端まで。何ふ行んとうつに出入する者なし。粉むべき菊まで来り
ぬ。其故は家老内記一人の娘お村と云ひけるが。伴助聞く
しけ娘に執心し。夜探送りけれ共。手もも取らずに浅き庭
を取。おりてむきより貰いうけんと思ひ。其三郎を粉て叔父
貴にいらする伴助り。其家督なくてやう出ぬとあらば。別
家し叔父の家とく伴はげんと。けりくと紀伊よく云ひやん
とおもひ。抱中乞て其三郎反宿にまゐる。伴助でおつやる所
意得たいと。あさまから出かけるは者の癖。ハイ宿ふおりま
をと。六郎あぢをやり。かくと其三郎に通ぜ。其三郎出むかい
是は秋葉明来ぬ。先こなるへと上座へ[illegible]。あべきかりけ

挨拶。いまだ其ことば云出しもせぬ処に。又誰やら抱中乞て
是も家中の朋家なるが。其三郎に中合せるなりて来り。
六郎乱次に出る故。其三郎反お宿になら一寸に言ひたし
と。云さる伴助家来言聞に入へ入れば。お客をと又交たり
更へは来べかりけ。是にて立ながら[illegible]中合義を。お手
るは乱すまじ。一寸是へ呼ましてたもと云へば。六郎ないく
と云て内へ入り。伴助と其三郎叫して居。こなる故法は立の
法より。首を出し。心をこの手拍をされば。其三郎合点行ぞ。
何ぢなる事志おるを思ひ。さら然躰まで居るなしを。お松
稚手より見うまして。是は何とまることぞと云へば。今ならい

てく見長三郎。見さ見長三郎。ちよつと来ゆれと呼ばれば。長三郎もおきれ果て呼ぶ也も世を。あれおつての年の毒さ。志ふふ事なさに立て来れば。どまさう是ふとおつ志ゆる。たやく出ゆれと云。此よし体かゝて。扨ハ長三郎と云者大き成たるけ其のなり。家来にらく此ごく家来あるくらいなれば。此を粗ても無益なりとおもひ。其後立て帰りける。悪志の走り智恵とハ見ホとやゝべし。うくて長三郎年月を送るとしく也。いまだ主人に見捨と云事も世ず其年も既に明て母親の一周忌もを付けり。長三郎清りく思ひけるハ。女房お妻と夫婦の約をなして。元年四年しを

繰れども。いまだ一度も交合をせず家社不存なて如此なる也。彼ハ何の心もなし。只我偽し詞に津いて母の一周忌ゆる我指を折て待べし。其時又とゝりを云べいう成心もおきれ果ん。なまなら我ハごくまずハ。おし出して云分ない姫。いう成者の妻を成て。お恵に世をもたるべきふ。結句我妻となして。尼法師同おの身分ハ。いうに志ても余彼なりと。急くと心をくだき思ひ思ひしけれ。なりり長三郎身分まで。松本民の所と云りの事。此者此親ハ津野の珠玉此家来まで。いう成科ハ死罪に行られ所所没収せられけり。時に民の所又者なりけるを。長三郎又

長左衛門。かしゆりまて引れ。長三郎分かまして持ぐて
後に厳へ申上。さぐらの所領ありて。別宅してあり。長
三郎とは一ッ遠まてむ平に入懇なり。或時長三郎民部
方に行。我は男に一大事を頼たし。頼まれあんやと云られ
ば。民部承は男の父長左衛門後の妻一生忘れぞ。いかゞ
ゆるしも明し無く。かならば頼まれ申さんと云。其時長三郎
其詞を聞人中。さして大事と云雑のことまてもなく。追
ひ抑し如こなれども。は男におぬく何をか隠さん。承嫌
は男根不具なり。朋輩其兄を知るなや。一度度南這け
る故。承文離と云ふ事が無念さに。業をむくなり。其は

男妻なければ。は男が妻としてたく。我又一子我も得し
きなり。は男が子ならば承が実子に何かことならん。男情
姫もせぞ。一ッは承を不仁と類しきへのめんれ。一ッは承皇
処の子孫は上やまべき。頼友とは只はことなりと云られば。
民部大きにきもをつぶし。かのことなら何ことまても此男の
子。一命を指出し頼まるべきに。兄は存も寄ざりこし。云せも
たてすたあらば得ぬしあるなら。京都頼まれ人との事
ひし故。恥愛ことを明しなり。今文得ぬなられば兄弟尤存
せぞ。は弓後とても此意得まじと。以の外に云られば。去
ばいなと申まてはなく。あまり不思義成を故に。一結は

お縫過よ及ばれ。お祖母さまよ仰られんにゃ何の御とゝ
いう結もお仏壇よ致さんとゝられば。もう来世迄
決来ねるまう。さらばしばしお暇もゝまん。帰
まる者をも。我が弓箭お納めて。又そ死べきおそう
らられぬとまれば。いかゝとそれもんざるい分。若
気もちうゐで。仏前織の書とまゝてあさまごくと
あれう。ひとやも教ねまうと。さへぞちくと洞と
こだくんば。民之助命をそ小まなとそれのみな。弓箭箱
をとゝて。枕あて又ゝ死べきおそうもめゝず。候仰られんこと
い。皆一ゝ承ねんせう。かゝまをゝあとそうれば

放。お父様よ及ばれ。お祖母さまよ仰られんにゃ何の御とゝ
いう結もお仏壇よ致さんとゝられば。もう来世迄
決来ねるまう。さらばしばしお暇もゝまん。帰
まる者をも。我が弓箭お納めて。又そ死べきおそう
らられぬとまれば。いかゝとそれもんざるい分。若気
もちうゐで。仏前織の書とまゝてあさまごくと
あれう。ひとやも教ねまうと。さへぞちくと洞と
こだくんば。民之助命をそ小まなとそれのみな。弓箭箱
をとゝて。枕あて又ゝ死べきおそうもめゝず。候仰られんこと
い。皆一ゝ承ねんせう。かゝまをゝあとそうれば

ゝ。お父様よ及ばれ。お祖母さまよ仰られんにゃ何の御とゝ
いう結もお仏壇よ致さんとゝられば。もう来世迄
決来ねるまう。さらばしばしお暇もゝまん。帰
まる者をも。我が弓箭お納めて。又そ死べきおそう
らられぬとまれば。いかゝとそれもんざるい分。若気
もちうゐで。仏前織の書とまゝてあさまごくと
あれう。ひとやも教ねまうと。さへぞちくと洞と
こだくんば。民之助命をそ小まなとそれのみな。弓箭箱
をとゝて。枕あて又ゝ死べきおそうもめゝず。候仰られんこと
い。皆一ゝ承ねんせう。かゝまをゝあとそうれば

放。お父様よ及ばれ。お祖母さまよ仰られんにゃ何の御とゝ
いう結もお仏壇よ致さんとゝられば。もう来世迄
決来ねるまう。さらばしばしお暇もゝまん。帰
まる者をも。我が弓箭お納めて。又そ死べきおそう
らられぬとまれば。いかゝとそれもんざるい分。若気
もちうゐで。仏前織の書とまゝてあさまごくと
あれう。ひとやも教ねまうと。さへぞちくと洞と
こだくんば。民之助命をそ小まなとそれのみな。弓箭箱
をとゝて。枕あて又ゝ死べきおそうもめゝず。候仰られんこと
い。皆一ゝ承ねんせう。かゝまをゝあとそうれば

よりくまふまる。我もまたぬけてびえべりしに掘と。おどし
つきうし川云られば。お松やむをなくよふくに納れせ
つ。其時民之所をひそうに呼ぶ也。母には為て沙汰なし
に志て。紹屋にて盃させ。家は庭先をえて寐より。史
よりして民之所夜く夜毎にといへた。俗にて知志な
し。尤如ふ如主長三郎手引にて無だす故。幸此付志
なき筈なり。夜に尚に屋形の一家起（千二百石と云）横田内記父子
の賀城祝して。一家ならむに志にしき朋輩を呼て
振舞志なり。長三郎小身ありといへども。そこし爪のそ
し詳に覚く志にしく出入をなれば。此答無に招

かれて。来席城汚せり。其所家中の諸士。大徳の宛中又三
人。内記縄体脇も一座にて。皆居一ツこなるは女中此一鮮
鯖に花く志なり也。本猪も死也る時分。内記人々に横拶
志なるは。扨て今日は打揃に入来下され。近頃そのこと述し。
史に清き只今所殿より急に召されは。子万法念ありら
死出る也。紹にてゆるりと抄捉下さるべしとて出行ぬ
一向内記殿尚ちなるも此純走此一ツ死と。若い宛中此云
ひく者も也。扨史より打まじりに話にありて。三味線上
なり。或は奏好棊此好如は。うきにて余会なく。蓼唅
虫と。おもしろくもない上瑞理に首ゆされて呼もき。又

志川ぬりまるおもては。いつかなかへは同もせられ。こなされ女
中むれへ推案して。おるを待ん杯と。おもせぬ湯をうへ衣
紋ばくり。むいき吾してきもはばさせ。翌日は頭痛縛
きで。痛るをもしらねたらけもを。私もけ横田伴舳。大志
はぶかしそ。祀より女中の中へ這入。唅ふ後よく頭上を
覚て。いとゞ去面ぬを。猪の尻のとくよし。いけもせぬ姿で。
かむ人さひ二ヨリ杯。処ぐうじりちらしし。始お村が参て
くるかこ。夫度顔をみても。しろりくるんとして居れば。
勝元のお姫が。伴舳様お姫の御案がちゞまりましこと
いなしたるもむぞ。伴舳はお村を首ざけなれど。

好な御案も同に付りぞ。此盃はお村とのへ是上いこさふ。
家に思ひ指ありとてさしられば。お村うるさく小姫も立
て。ましは一ぞいもたくませぬ。名代に後におせりなさ
れと云時。いゝ忘れしもたくませぬとも称られ。例に
居られる女中がこのまへ去とは年れどく。そて何は急
も角も指さる盃はいやとは近頃ぶしつけ。兄弟ともとお
村にさし付出ば。そて我んなこと御志しぬが女。いきなり
お川志ゆるは男に社と。云打うしも三歩小男に立て。後り
さま小姫がめて毎りられば。お村袖ぬ知えて。伴舳様
吾もせぬましはをらくて。なんのかれと去とは迷惑ぬ

しつけながらもさしが名代。おまへあがりてもけけてあれ
と。もう来へ思ひれば。イヤ私もたべませぬが。お粧とあれは見
非なし。志うらば伴物なお設めなされて下されと指度せ
ば。あまり意なり見お嬢の君。今れは直にやらなんだ為
にふくれど。今度は粧む号志てたも。鬼角女がなければ呑
めぬと。臻えて指付数を。ハテ幾度も卜無り嘆もきらいで
に座りますと。二度の配厚にごうたらにやし。叙父様が
酒が嫌いな。どいたもこいつも酒乃お法も志りおしぬご
くどふせと。側敬源橋主水内室。玉江殿へ急ぎながら粧
みをるとさせば。いうふもめたるお盃一つ上げてうらと。法

きもとされ。次郎されば。お嬢しとの。愛をさらと又おさく
志やと。当新所が不首尾なるべ。志ようなしに一つ変る
も。憎くさけにこびるく程法ぎかけられ。忌いやけと音
だ。お嬢が立て飛子れかうり。さりといむごいと又っ六つ。
呑かぶけて。よふく長ふ来へ盃が行と紀。お敬さべぬぞ
をうし法いでなられと云へば。お嬢が仏好てたらしくと
一二滴見は志やらいはうはならぬ。呑まれても呑辺い
でも。名代なれば見非一つと。手を指添て伴物が。なるく
とつぎければ。見は去とは迷惑千万見程さべたらうに来
るまいと。をうし呑て下に垂ば。お村手盃押れて。まいつを

もせぬおんふ是程どふしてと。云さまま分を呑れば。
是程我お嶋が丸てぐ川と法しぬ。伴助ぐ川とせき上。我
木がさす盃をば一滴もたべぬの。いやうぐもいやのと。是
ぬぐんざひめもおなじうふよぬうして。其ふ来法けざし
我二人して呑とは。八幡塚悪ならぬと。其悪よなれば。お
村云様。ならいが参りよ其ふ来様呑ぬ人よ無理よ呑せ
ていまのどく。嶋がつぎたるまくまて並ぬ事ぐ為ぐ
きを。此身手をうけ無理よつぎなひたる。ふるこの事れ
とくさにならい呑ぐう。其上此身只今。酒の左法も志ら
ぬぐくとふ其とのなひしぞや。其左法も志らぬぞざう

我お手に。酒呑なふいいらぬをなりさ法なりこれて
せん方なく。勝元よ丸てうり。おのれいうぐも嫌いざとぬ
うして。其ふ来が呑河内しをなせ呑ざと云へば。去れば
私もよき程よ法きし我。お来へ無理よ川ぎそへなへば。純子
我持たるもたしが科よ成て。此身のおかげで呑れぬ酒
を呑うと。どちらへ此川ても云法められ。むせうよ殺
い立其仕方なし。其ふ様い打無しと。此盃属しまらくも
ちらかり。たべ無ふ仕らんと盃持て結手へ立ば。伴助ぐと
里手持なく。誠よ女の中れいり更まて。絶いこげる程。志
悪よ。服をも切りたき程なれど。何知へ丸付しまもなく。

さらば物素に致そふと。面もうぶらを沼の方へ。まぢり出。
まだまけきりもせぬ物素理。此身まけまり。我ホ敷と理
理に弱かきよせ。押なをつて。指程に。まとれ物素へ法に
くて。引つけて又六歳勝れば。是そ少し気理なをし。
さあ夫から例の意悟。おそらく家おに續く物素は是な
し。誰にてもお手は嫌らぬ勝て見なく探と。おとりして
廣云云へば。是田文内も三歳理呼れ。其後は並ぐ物素
が法らいと呼。あまり自慢故に一歳指てこんなくと云
ば勝れば。イヤ拙者陪が下手にて。中く、此ハ手に敗かさ
れをと辞退されば。頭たる人く罵後。祝事。小倉野鳥安

達而取重と無理無ないに。押なをせば。こなたれ女中達
も魚指出し。伴胞が出ければ能がと。おそうに云もおかし。
長三歳は三段の物素なれば。伴胞いかて及べき。思ち一番
頭なれば。皆々一度に口理指へ。伴胞反自慢の鼻が云し
げたりと。笑られてぐ川とせしかど。今れは一手見そく
なふたり。今一歳と指出す。是もこもなく南無三宝。手を
呼ぬが身が廉おと。又さしなをを三歳同。香隠づ先に敗
なれば。ちまや一ツ勾も出たらそ。お村は例で小きみよく。
長三歳が後ろに出り。扇子を打てあおぎなれば。伴胞こ
くくせきあかり。イヤ想ない素物素と云ものは。分別の和。

る麻にまくれて強いが為ものの。先は其三和と云奴。古今無双の大る麻ありといへば。其三和むつとせしかど。さて庭奥に元なし。是は又きつい頁だらなりと笑ひければ。イヤ頁後でないたるけの説授云て呼そふ。皆々も呼あへ。いつぞやこいつが取へいろされば。家来めがつい立れかげから手招をして。其三和く一寸来ゆれと呼。なんと家来に家来に是程る麻にされるたるけをないもの。但し技打結合も無ぬ。くる麻にされるのか。なんにもせよ大たるけの大負ぐぼう。なんと一云も為まいがなと。然口雑云。さをがれ其三和も虫にさるつて赤面されば。

いやこふ云れて口惜いか。口惜くはおもにまれ。お茶には頁ようが。武士の職分にはまけぬ。さあぬけく。其筋立さ面付は面目ないか。是で源して見ふと。足をとつて其三和が奥を押へられば。そらや悟悪なりがたく足首志川かり掘りしが。いや待志だし我家は大事の命。お主の御用と為人の者へやら称がならぬ。まづひとつ詳しき程の命を。無益のことに打果していと。掘りし足御そつとそれし。表を和らげ。内記内家兵にお村にむかひ。扨く今日は御祝走和し。お帰りなされたら宜粉まる。どなたも笑ふゆるりとく挨拶して。をごくと帰りし

ハ。去りとハ 嬉悪(えれ) 侍らき 男(をとこ) なり

童唄

古實今物語

再板

二

古実今物語巻之二

松前長之来が中の来

一人の人は千万人の人なりと。杜牧が阿房の賦に出し長之来伴物にさはぐ悪口せられ。あまりさへ足うて西を踏まれ。一云にも及ばず迎ひしい。此具とやらん猿病とやらんと。一座乃人々の呼自然と家中に廣が里。血の手乃多い所待ども。吟ばらく。武士の風上にも垂れぬ猿様と。無りそがいに逢時も。嘔吐して詞もうとさぬよふに成行しい。無会玉極の事なり。伴物はいなく家まゝ振ひ。折にふれるにうちへてい。長之来を踏し自

福田文庫

慢咄し。尾に尾を付ての廣云ふ。今はちや聖云も得と見
がさき程の首尾となりぬ。されども長三清。とても長生
すべき身にもあらず。押付二人のまゝ討れて死時。自然
と此垢はぬけべきものを。史につけても主君に我法と
むべき大儀の作用もやと。是のこゝろにかゝりて。おもしろ
からぬ月日を送りぬ。爰に奇代の孫子こゝ出来り。能
周の遠去。城下より十里ばかりを瞞て。深澤と云此ゑ。三
方は平地にて一方は深山なり。彼山より毎歳初交の比
大蛇出て池の水残呑。手打首毎り合ふる者。是が為に
ぶくせられ。或は弗ゑふして遁れたるまも。たちまち疾

付て三日も立ざるに死す。史のこゝろなれば遊魂の回畑を
あらし。民百姓の困窮大方ならざるなり。江へ出れば
能主何来反吟こしめさ也。家士此門筋是あらんまゝ。一夜
紫大物として。討手をひけらるべきよし。給出さるゝと
いへども。誰ゑて乞更るまもまく。此時社日法廣云ふ
し体動も。虚病して出仕を引けるとぞ。長三朱はるを吟
て。家年来の重時取れ里。此討手動かせなば。一つの法大
事をつとむると云ふものなり。あらく力およばれして。命
を取らるゝとも何とせん。是私のことりあらず。お主の
為未来に取て遠師名安に云訳せん。若又首尾なく大蛇

を追治せば。かれ等夫人の名を付れて。宮中が冥途の罪を
晴さんと。宮殿の見情格。右の討手を先更ければ。若侍ども
ひとに。彼大地は伴ふかりは粗黙しきぞと嘲笑しられた
耳をもかけを思ひ入て頼ければ。孫に云上に及び。さらば一人に
ては心元なし今一人添られ。雜言をも付らるべき事。仰られ
られた。長吉兼道て先を辞退し。家一人にて所越べし。家力及
ぬすして。大地に呼くせられば。全ひての時は危も角も。先は
度は私一人先祖たと頼ひければ。たゞき志ありとて其あと
ち伴客をかり。吏より長吉兼宿にかくり。志かく〳〵の法
云て行んで孫に眼を探し。其代の刀大原の実盛。二尺三

すをかれをもき。日は好ほうる大筒を用意し。彼をも此
出ず只一人彼深沢に至て見れば。誠に仏のごとく。近き十
四五町が万此田畑の進もて。人屋とてもなく。実に物を
さましき体あり。彼沼より八町ばかり御陥て。八幡の矢
あり。先は先年源頼義公。奥州下向の時迂発しかゝとも
や。彼社に入て一心にぬかづきをり。家人頼は中さずと
ても此存あらん。何卒尚社頼護の加被力をこれなひ。万
民をなやまを大地は追治させてこゝ誠に我非力を以
大地にむかはんを。宮命のやうきか。去ながら大菩薩の
威力をかりて。先を浮仏せんと思ふなり。たとい同商足

なんて。不具の人は故と云とも。ふげの四又日の命を生
ば。編に高社の御利生とおもふべしと。丹城をねきんで
一山に祈会し。時至る城を詣ひ給ひ。法は七月の末に
て。雑景さんぐさうりゐるが。漸秋の法におよんで秋風
そうぞ。身もうさく故に。何来その大地いふ程のことあら
んと宣の山に十倍して。志げかに糧なときひ。気味時分
にも近付ぬと抑りひければ。長近城長し小手御高して
鉄炮をうたげ。往城出て法の色にいふ。こゝかして窮
に処り。ちるかにむかふのふより。法風志きりに明てあ
ちも十月法の風吹ぎし。一山震動して草木を吹

ければ。そのまゝ今社とあらず不に。電光おぢさしく志て
法身に近付ぬ。ちくしてあれば大地の安眠のむかりな
里。丸盆程の眼　むかりて形は更に見へず。弓二町程を
隔て。毒鉄ぬりたる玉城大筒にこそ。安眠のあらい頭甲
とおふ不を。一分もたがへず打たりけれ。されども大身
の大地にたせ花来るを。早玉にこそておなし不を三
度まで我打たり。見えてかしかりけれども。猶以弟小
ちかづきて。今漸くあらい二ふりに及へば。玉を近べき
ちもなく。腰なる実盤を引抜。志たかに指つらぬき。上
に成下になり半時ぞうりぞをみ合しが。長久来見てん

切たる志なれば。大地が首の元にしかと志かせ付てもなさ称び。おろちは兄弟なりまゝで唸るんともがゆども。猶にまなさず。手中にも手ごれ名なれば。なかしこ十一刀まで刺たりける。宛物毒面にいさみしかん。名作にて十一刀刺れ給れば。大地も大にあらず果てのされ婦たり。其ゝ朱も忘身石津かれ。但ふせたるまゝ、かりて夏ともなく現ともなく成りるか。何とゆらん熱身志ぐら逃たるにてく。一寸も動かれさる所に。忽然と白衣の老翁所れなひ。汝おろちが毒字にあてられたりとて。[illegible]抱抱なふとしたるが。忽熱身そのごとく。石凉やかに

て正字付。あたり給ふれば老翁はおりしまさず。扨ハ八幡大菩薩にてぞ在まさんと。感無行にめいじてきがたく。社の方伐婦抱み。追急を跪出りて百性共わ何も。[illegible]給右此以外注進志ければ。主君何乗反呼こし百。[illegible]迷に[illegible]るにて来らせなふ。家中の法士家もしくとは供にて深に来り。右大地の姿をとるに。頭は四本杉に云しく長四丈ばかりもあらり。識に長ゝ朱正八幡の加彼力にあらんば。いかでか付とぐるまを持ん。主君何乗反を他法士百性に知まで。長ゝ朱が武勇人ゝ業あらずとぞ感じたる。此時こそ日比そ志りたる右ハ口を閉しとりや

夫よりは内儀をて長々出をは出され。此度のまゝ莫
古の忠勤言語を絶すると此は称美。長々勝をうたく年
伏するなり。此加増として二百石にしまふ。只今まで百
八十石にてきしを。今より三百四十石にまされね。長々出
道智の人にむかへ。きがらく存なり此人は。私家は服を
新なら所存にて此年にへば。此度乃は麿美に三尾らく
此服にし来れはつゞ。私身に死て此上もなくきがらく
存なるべくはとゞければ。是者ぞこしにされ。仰せ言
得さる新ひ服の事は曾てあらすと。再之に得べとも猶
に此許容なければ。ちからなく加増現載して退出しに

まゝ。くて長々出一夜日を経て。今はまや親の母は是
をも勤より。さらば討るべしとおもへ也。今までの情に
むかへ。其討かぬるとやあべし。又家宝房を討しも。そう
らうずしてなれば。家も又おもひ家に討てこれは去
じと思ひ。女房お松局なる日を待て。母を一ト夜く結ひ
るぎと龍女をうへ。家今までは男親子に随分情厚く致
せし所。お雲家局を考へ思ひ男を入て密通せり。夫人
是に討て捨人事は安けれ也。お松を殺さば此男歎かん
事不便なり。今度も家通り妻にて出るなり。此男ひそう
に痛むづまりたる所を考へ。思ひ男を殺しまへと。九寸



人身をめてがいければ母大に驚きお俺が娘が所存悟
き密男うれ。去まがしらはいへ人を殺事は恐ろしくはへは何身
女に無始大に殺さん。さらく悟とおもふまじと云ければ。もう情
そして何身殺しあらはれは何身も同類なり。今より親子共此内を
追出すべし。衣類及具皆家抽なれば。其身を伴ってからすべし。其
上今と家情を持てもとくみ立し所。ケ様成者所存なれば。其立
無として何身より云貴。お松より此貴。身を賣せてなりとすべし
とかうしける。先をや情無くるまとで。親子二貴子に此貴と。唄
ふぬべし。けおとしを呼て元より おろか成女等なれば。たあら
バ何とせん殺べしとぞ交合ける。もう情喜び。たまれば何



身用類の頼ひもれよう。よく〳〵今宵更てから寐まづ
まうさる所を考へて教さるへし。かまうもく〳〵お松ふれ
祝つけあふなと。いまだ人の殺りさる体よおもはせ。史
より紀屋に入て今までの一部始終叮嚀に出来して
扨民の命方にも。きべうくれ咄二ッ三ッして立さるに。今
宵はおとゝ字細あれば。必来方に来りまふをまれと留
て別れり頼が。又ありうへり何とゆゝ為殺おしばに。い
つぞやも申せしごとく。為来いうまるまして死んも表れ
ぞ。其時は法身我に成うとりて。お松親にをそどくを
まれくとして立出ぬ。そてに其日も暮て初夜の頃にも

成られバいつものごとく家内を仕舞せ。千身ハ波出を懐
中して。お松と共に祝屋に入て寝るが。お松ハ寝入
たる時。ひとりに灯を消て。石の門に佛名抜とるべ。今宵
を淡路の名跡と定めしい。誠にあぢきなくこそ思ふ。志
ゐ乾如に門口を志きりに拙く書されば何すゆらんと
耳を抱き立る所に。殿より志所用まで唯今所出べきと
のすゝなり。打無しいうくいせんとおりへ共。眼前主の所用
をうきて死ば。今とゝ石を受しなる君等も無よしる所理
死ハ一たんとして安られば。今宵ようぎりしるすもも
あらすと。思ひ来して手紙立出しが。ふ所とゝ石付て。受止

められ共いかやうとまれて。民の所今宵来らば出すなりと。
又門口に立書。号紙も申せしとく今宵ハうなしず来
望のふなと。云捨て所殿へ社ハ出行ぬ。役人中約定て。又
不思議なるを深て濡たり。其所ハ横田伴脇。叔父内記娘
お村に執心去て。夜に金といへ共。内記許容せさらば憤
振舞ことなせ家方に内記を呼入也。右お村を強立つかり。
終に内記を討て逃失んとする所。内記家来も出口を丸
囲られば。兄弟なく蔵にとじこもりとの注意。去に
結て出所に百捕せるとの所意。出所手なとの後ハ此る
此源法まで能所なる上。きやつハ出所と意趣あるを

家中もうち知ずなれば此討手其義はきましと何を掘く
て云はれば。其三傷仏に思ふよふ。家死るまでもきゆ川
を胸無る仏身におはりくれ。朋輩を付はれ君と思くはそ
生面て死るの殘念ありしが。春のるありと大きにあるこ
び。急度お更りて、雜蔵より古き幕を取出させ。雜人に持
せ伴胸方に取り蔵をアれば。内より戸をさして百捕に
来る者あらば。不言に付拵んとアゆる柘子なり。其三傷
戸口にてこらかれ。伴胸たしかに呼ぶ。家は先松お其三傷
あり。なんちいつぞや家とおもしまくんと云しが。今こと
と世が年のごとく。采の猪頁に呼べしと。云き。をお家

に戸を敬ちなさせ。捕さて夢をかけて幕をすか投込け
れば。仏切さりと切付る。刀鉄さくにまくにかれひ
つさくり。飛りて刀て取ておさく。高手小手に縛り上。お
のれ能面を足で拵し。よきものゝ思ひまれ
と。足て面をふミにぢれば。くやしがりて唅付り新こ物
めさましき。不迷はおへ引おせば。手掴くとは麿頁さ
て。伴胸をば門紀要子へ下されぬ。其三傷は母の約束お
がつかまく。さしやおそしと宿へ帰れば。おもひも家ぬ
民の命。行先つかれて今宵の源。ちりとかけようとよい
ろ。こゝくいるとなるば。母はさしくおどろかず。これ

長三郎夜絢来の遊客吏を殺しましたが。何身の咎ことと
とゞめをば待てくれとゆゑ。お待しと。云ふ。長三郎書なし
したりと。何もそゞろ事も狂乱。うろ〳〵されば お松も
きよろ〳〵。恨めしそふに長三郎を。そう目に涙浮めしい。
むありやふが〳〵し。民の命長三郎に云ふ。何身若くの玉
ひしを家。吏に合点しかず。第一不具とまこと見給ひ
り。家幼少より一所に育てうく知りぬ。扨又弓箭を
しまて者に生死志れしとのまひしを。是も不実の一つ。
去ありし何にうしず何身の仏に肖くまじと思ふ故。仙
ごとも織にうけて居たり。志うるに今肩家とさゝめ玉

ふとて。壁のほうれに何とゆうきうなく。娑婆の名残に
よふにまへ。詰〳〵の事まで粗みまふ故。扨は何身の上
に苦や今度覚ひまてうくのまふか。何ともせよ行てえ
んと。二度まで止めまひしをおして今度来れば。さこし
てうくのごとくなり。去までも何身の討是ありん覚悟は
いか如何ぞや。吏を学度ゆと若しげに云ひれば。長三郎
とこふの挨拶なく、へゝ志ましたり強会や。今は悔てうく
らず。サア母人お松。夫人家て家を討と大小ふたりにあて
ぐれ。母もお松も共きれまて。狂乱なし志まふかと。云よ
りかいなりけり。時に長三郎懐中の出来を見出し。

母にむかひ。重経は男に云しまゐは。我今君は男に付
る所存にて候なり。是を見ゆへと出立をとらせば。夫
人にて是を讀に。出給ひ一度の事。一我先年雑子の山に
て是同より雑子と思ひ。もうらずも此男が史筆蔵意安
を討しなり。後悔されたせんかたなく。早速名家は男親
子に討出んと思ひしがど。一人の郎母弟一身君の此大
事をもつとめ也。事変死せんす不君不孝の知りと思ひ
なをし。此二女朱銃出るを待てたべ。言うまゐには史を
は此男が妻子をもてくまんと。事変意安に約束して。
知そうに源し埋す。去れよつて女にとらせお松を妻

とし此男を母として今日まで暮らす。去ながらいまだ
お松と下痴も睦背なばなさず。従るに去と年母は男を
かりあひ。主君の此用も此度動されば。今社名家て討出
んと思へども。今までの無筆に知られ討出ならんとをも
かり。且又此男が史をもたうらずまて家討ぬれば。家
も又此男に思ひようず討出んとかくはたうらひしな
里。物をうへ民の命を。先生をてより家仲人して御松と
史姫にあし面ぬれば。死後までもいよく史姫の交なる
べし松と。こまくと出てきを讀も終らず。親子はたつと
あきれて詞もなかりしが。民の命されしゆに。今此出立

我等て家所存も重なり。初家は長三郎まで所身達に対
逆が。そちや歓打に及べからず。家身長三郎の親長は
婿つ原の大悲に成し身なり。よりて老く長三郎
身に難義あらば。家兄に頼らんとんがみし甲斐あつて。
今命にかはる本望さると云はれば。母は涙ながらに所
身は悲に成しとて命に頼りなふ。まして是らは十年
月喜育の悲に頼りし身なれば。あらまに名案なふとも
なんぞ歓と思ふべき。殊に所停止の山に入しは吏の誤
里。まして今やまちまでの事成を。吏とも明しなすず
していさましきを致せしよと云へば。お松もふし

まづ三位より外は何なし。長三郎民の郎が志を感じ。
云に云逆ぬ所身が実義。家とも嬉しいとも。何と何に其
さ逆ふ。存の外なるをなぐら今までは兄非もなし。いさ
きよく陳絶あれ。御祈ん比にとひ中さんと誓をきらん
とするを。民の郎とぞ申て。家又一つの粗ミあり。宛不敵対
は渋ぶれば。今より所身改てお松を妻に持てたべ。一生
一度の粗ミなれば。よりや君とはのなふまじ。お松も母
所も異義は無まい。相まさ一つの大事あり。家忌の事内に
検使をちやくむかへられよと。云に事が付いうさまと。
不速検使むかへられは。別浮橋主水富田清左衛門。毎人

立合。委細とくと申とゞけ。妻人の心底をたんじ出来を
指示して。玄上に及ぶれば。主君も感心ましく。民の命
をいたかるなし。其後諸君古今に帯如右孝義出と所称
頂戴て。則其翌日伴卿を召捕し所饗頂として。一家充内
記諸国相續給付らるゝと。右の妻人を以給下されけれ
ば。其後諸家て無雑くは存ゆへ也。私家お松と申書英に
母も所産ゆへば。やはり此分に指置れ下されゆ様にと
頼ける。其時妻人。お松なれば民の命妻なるよし妻御所吟
味の上のすなり。其ハ諸国を給付られ民の命家を立さ
せんとの思召なり。所自分なれば今朝内記方へも給ひ

されし上のすなれば。何方お交あれと申さなれば。さんは民
の命出来まで浮て私妻に仕ゆと。押込して頼られば。さらば
とて又立帰り右の所申上。内記方へも其所給下されゆ所。内記
後家英に始お村。一さん御付られゆ義。又ゆ所美愛とは其意
ゆざる義。何分其後諸。内記家督給付られ下さるべき由達て
頼られば。夜にも止るを得ずまづして。又人の右召出され。内記
妻に向ませなひて。其後諸義先達て吟味せし所妻のよし
如故。其方ゆへきさんと云しなり。志かるに民の命遣云
に付。かれが妻松を。其後未妻に致せしとの頼なれいち
ゆゝおよばず。此上は夜よりあらば直に其後未にまされ

しと給らるれば。お松も三郎にむかい民の郎反迷立あ
りと云へば。ならいがるいくるしからず。此大家のる様
にはあれ程に此熟望なれば。内記反此頃は此續あれ
うしと云へば。お村母に向ひ。も三郎反内室見めらい。お
ふたり共にならい方に引れ此續ものみなへ。ならいし
家来と如べし。も三郎反て取りゆくば。其ことに出頃の
義士。もうへ武勇といふ。かよふなる人手段をつとめら
るれば。且は お家のお為ありと云はれば。主恵を知めみ
なくしけ詞にうんじ入。流石は一家老職の息女なりと
ふに深く養奴。お松見を以て向神なきことなり。何しに其を

へき。もしいこと母儀とも家来となり お給しべしと。兎
角一決せざる所に。主恵志だらく法也棄まて。なんぢが
名は松と云内記姫は村とな。我は名につき一の所存あ
り。も三郎見兆とも内記家督お續致べし。扨内記源家は
勿論。大家を譲る其の母なれば。む大切に致べし。又松母
はむ給立といへば。眼お吏の歌をこん遁て命の釈なれば
見又孝好に致さべし。扨又女人の姫は其に兄弟の名を
して家来と如べし。も三郎一生妻を持ちなりれ。家かく
云付ならるれ。女人の名に思ひ当しるあり。往昔中納言
行平須戸へ配流の時。年礼の二本が兄弟の姫。松風村雨

とえへるを情うけて百結ひしと呼く今は女人の
とりハ松といへれ松風に似たり むとりハ村と云
へば是村面なり。今より其情女人の名方に深く情を
うけて百結ふべしと。發明なる所上意。はよれとお文ト
せば何歳ならんとびて是雖く務なりぬ。夫より其情手二
百石に自分の三百四十石を合。都合手四百四十石の重
となりぬ。是候し右巻の二ツ金く。又常の頃にうけざる
隠蔵の形れしとうや

童喫

古實今物語

再板

三ノ上

嚢 右実今物語巻之三

絹屋喜三郎三人の姫の事

ゆうが姉は三人ござる。むとり姉は鼓が上手。むとり姉は棄功が上手。むとり姉は下谷にござる。下谷一番仔逆者でござる○此嚢の濫觴はさのみをからぬるまで。七むりし程まもなんに戸本にて。絹屋喜三郎と云もの也。子共四人持しが三人は女子にて。末一人男子なり。悲願をおきぬと云。況をばおさみ。三番目をおとみ。末子を喜右郎と名つけて。いづれも生れ付よき中にも。雖に三番目のおとみとみて。眉目うるち十人並に越へてぞ也は

福田文庫

る。釈父彦三郎者〳〵思ひけるは。無願おきぬに聟を見て
家督にをべきや。但し末子なれば老者帝男子なれば。是
につがすべきやと。いまだ心定らざる間色行月日立や
そく。其上釈父は年中四舎あるきを商買にそる男なれ
ば。毎一人にて大勢の子共同もくだり足ぞ。今年無願お
結十八歳になりぬ。或日心願のすめりて。招津権次へ来
語せしに。恒き町人の子なれば女とてもをらず。小調命
一人をつれて行しに。其法は此人足まれりて取し
に京の相なる所受くをけり。其後そがら淋浅所にて。結
友人酒に酔たる体なるに行合けるが。招津へはこふ来

つまひやとおきぬ問けるに。通答もせず一人の結おきぬ
が右の手をゑて。是は見事と云て顔をゑれば今一人が
又右の手をゑて扨も更しいと云て顔を涙るにぞ。おき
ぬぎ行として。是は何となさるゝ事ぞ。去とは理不尽
子弟なりと云ば。右の男是はどふも大まらぬ京で京生
人やと云へば。云ふやおうぶとたりが答へて。サアこなる
へお出と京中へ連行にぞ。おきぬ出しく久くと泣ふ
れ其文に当へ事。無理無こいに引立るを。調命権者命ゑ
をがりてとゞむれば。おのれはまくい奴と云さま。刀を引
抜ておどしける故。恐れてたまし迎けるを。一丁ちかり退

失ひ。れて。ゆしてあまたなる。處の志げミの木かくれへ。引掛ひ。ゆ。兄非もあり。調布はちかくなりしまり。しりてもあたまに人なければせん方なく。泣て居る所に。又侍一人。無りかりて。調方が泣を不思義そふに見れた。侍なれば刀にうりて云ざしもせず。うらめしげに侍の顔をみる故。何也。泣ぞと問れて。怖ぐながら今の様子を云ければ。扨も云語の新なり。イデ助てまいらせんと。調方が教し糸中を一文字に見行て見れば。懸りたる處の中へ引込口を手拭で志だり。泣に粘藉に及んとする所へかけつけ。兄は各理不尽な方ぬなされ方定て此酒

粗と存る。其女は處に泣かりきまして仰へば。此方へ此流しにされると云へば。女人目をいからして此迄は大方調方めに粗まれて来たるならん。其ゆく立さりあれば其かなり。邪广志免さるとお為にならずと。みぢんも引ぬ云かこなたの侍も云がうり。イヤ出かりきましは兎も角もこふしに非理を見捨て帰る事ならず。兄非お流しなければ。お相手に成とても切。そごくとは屋り中さずと云へば。兄はおどして引ぬと思ひ。俄に打て出て家にも今生で骨折々。定数ゆらんも謝念なり。たあらば其所も家にと一所に此女をなぶりて楽しみなんや。又深く数

おもしろかりしんと云ふまで。此男縁手者にて。大の眼をえ
ぐりきおのれホどの畜生の志似をすべきや。くそだ
けめと唾一口に云へば。女人もちやらくんか。やを二を
めがぬりしなり。おのれは死神が付きそふなと云ふ引
抜て打てうる。ふぬうりと抜合て。あちらこちらと行し
らの内むかふはふかりをおはれたりなれば。あまた疵を
も負はれた。女人の志は酒に酔たるまゝ。同も定り称ばれ
しこき身ぬりも出来ず。こなたは素面の美者。一生無命
と後合諸辺で一人を断例せば。玄葉も例を今一人見
て逆行を追うけて。是もおなじく断ふせ女人たにとゞ

めをさせは。手隙におきぬ志ぞりしを拭引志やなぐりて
抜くどなたかは存せ称ど。きなく抜嬉しく往はへ。おんぶ
にめやうい所をのれは好た。俣かく手を負しましたる
事。去とは手のどくなる美なりとて。例に寄て血おしぬぐい
はれた。抜ケ所のすなれば更に此うを。其時侍衛ならざる
をなれた。ケ様な人外たをは討おふせて快に。そえはいづ
れの女中か知たた。めれなる所場に小者が待て居たり。
いまだ立去べからずちやく引つれて帰へられよ。志し
けをは此男と承ふり外知者なし。必釈子も御法して
あらなと云へば。何が抜ましはも配に成るなれは中生

ド。去ながら〻相に手を負せずしも家なれば。いかゞ此方に
てゆやせ先て此事を送りたしと云ば。家は安田幸八と
て南時治人志なり。約辺邑に居住致せ共。うく手負ては
ゆられまじ。家主を所の志不審するは治定ゝ上は報せ
し故人定て主人をべし。後日の詮義なむつかし元より
妻子もなき身なれば。是より妻に善提所吉正なく立越
粒もしき住僧なれば。ひそかに粒て疵書生し。そうへに
て深川邑に出かりあれば。おもむきて年ゝかせがんと
存なり。今こゝになろふとは思ひもよらぬ事ども。これ又
約束ぞ如べしと云ば、吉正ちと作らるゝは。本人は吉正

ちまてゆや。いかゞもと云ふまぞ。扨はまらはが善提所を
望。おあらば又お目にかゝ都とも如あし。先今日はお別
れ申ん。くりとなぐらは恩は忘れ申ぬじと云ば。如ちど
は縁あらば又は意得申ん。家にもくどひよふなれど。今
申迄。必〻親兄弟にもそ相し下さる時じ。望に耳と申
て。何処からどに廣く如へきもとかられず。後日かりす
しれて詮義に如なば。右の所云知らく屋しといおもへど。
是又絶縁のなひ事。死人に口なし所身と家になれ合て。
意の意趣などゝ知れてい。とに依て解死人にも如べし。
彼にときの大体のうまりに死事。無念至極なり。夜の程

を能ゝ得られる。拇文供にいれられる小志は。妻その
相手は志し孫共。是又最おうしみなまで口をとめられ
よと。丁寧に發へて居れぬ。おきぬ元の所へ出てゐれば。
いまだ調方の居たりけるまで。よい所へ行のお侍が見
へて。よふく迎て来たり。早く帰るべし志し。此事は亂も
恥なり。是方も恥なれば。うまりず沙汰ありしまでしと。
口を發れば。何しにかべし私もお供志なかう。知たり
間へ帰らばこいていなめれば是かまじ。夫ゆへ是に居
ひとて。喜びてぞ帰りける。拇浪人幸八は。是日養子を待
て善程所吉正ちへ来り。知そうに後悔に是。くはしく後

里て料られば。料もしく清辺まれ。穿子にも志しせず一
月へ思はせてうくまひ垂れり。お絹は宿へ帰りてもふ
をまず。今日幸八が見しまでは。いう恥しき目をう
けん。夫のみならず命にも及ぶ程の事もあべし。志か
れは幸八度は。命の親とも云べし。是人に手を負せ何ま
例さへ。住居を捨させし半。うへすぐも手のどくなり
と。ふ一ッに手をいため。翌日に成られば。墓来りそるなり
まてちにり。住持に垂て知そうり右のうけを咄し。いづ
くともうは見屋中度出られば。如何ぞ此狀とくと
咄垂たり。むたまへきすにひとて。幸八が一月へ入られば。

お絹うれしく。志ばらく安否を問ひ抱して別れけるが。
史より折ふし思ひ返ひ。送り抽拵するも。人目を志のぶ
るなれば。大神のことにいらず。志ゆるに年八歳も大方平
金志ければ。或日おきぬまりし時。扨兵今までは心清か
いふ事なく。家にも大略達志に成ゆくが。深川迄へ来
らんとなるなり。史に付ありなき所無心にてゆくた。何
卒金子二歳も見して給るまじきや。此る南経緯の世話
に成さる。礼をも致度ゆくた。所存此家にも一緒のいて
もなくは。深川へ立越てはいで。も見して尚ちまで庶し
ゆさんと云ければ。お絹あきるまゝと請合ければた。如の

るなれば何と也見ればき様なく。唯知そうかり家が衣類
類異を賣代なりしてと。せひ續けて立ゆりけり。此日宿に
は親父喜之傳田舎より帰り。皆々に對面しておきぬ云
とりつゝさる故。母に弱れば。墓来せしと云ふ。今日は忌
日にも行らさるゝと不實されば。若志成立来。急てお絹
に意暮して口説ければた。吐入ざる故兄を恨ゝにせひ。所
おて想じて墓来にうきらず。あれへの兄へのと。お母ち
の内度く所出まては。どふで能すは出来まじくとさん
ざんに云ければ。親父以の外段を立。母をも大キに志うり
居る所へ。せひありけるに立ゆるお絹。引よせて大の眼に

角を立。おのれは蜀鳥の内舟祝をあるとり。方く出め
るくは。何の用で何所へ行。遥差あらば申せと。四法あら
れても云ひけるく。答うつむいて居れば。去とは大それ
さ不屈をの。うさ〇て門口へも出ることがゆるさぬと。臭
へがいこまれられば。籠の鳥となりて津くぐと思ふ様。
ひふよりきりてうく如くるは。いかゆるぞ。金子を無心云
られしな。再びおと活れもせぬ。さすが袖き町人の娘な
里と呼や。下しみおりひなさん恥かしく。口借きるなり。
恩を切て殺せざるは。書類まもおとり為り。とても
や。金子は少兄なら移れ。今年欠落して何出すてもこれ





りさんより有まし。不落れ罪ハ矢尾ゆるさせかくと。一子達
ハ心をさゞめ。人々の寝ぬ寝ぬまゝ寝ぬ。思ひ出
て寺にいたり。あやしげなる樹迦の垣なれば。まんまと
くぐりおりつせ。幸八が居るを入て。右の訳をもなせハ。大
に感心して。其所心底を望よハ。かしもぬ生と存せず。汲
里立りかへと再三に云へ共。更にとゞまらざれば。けうん
ハと幸八も立除心底に定め。左あらば任傳へ對面ハ如
ましと。出張を書遣す文云に。私義所々大無に所なり
和仕合生々世々忘れ重ぎハ。所存の分分也へ所礼
仕るもぬがたく。面目も花なきまゝ今宵立退ハ。立身

も仕ひけり。秀吉鞍馬仕べくほと。慇懃に出強し。夜明ぬ
先にと深川さして。まことに痛もせず。意もせぬ。ふたり手
を取組ての気遣ハ。古今稀ら歩をなり。命ハ義に依て
怪しといへる詞。宜敷ら事お給先達て。雖に逢し時さの
ご命におよぶ程の事ハ無しけれ共。それをこそけら
れたる無がへしにハ。命もおしからず親をも捨たり。人
の心をよする所皆かくのごとし。去ハ表ニ情方にハ。お給
ひへぬとて方くさがせた。志れど憎奴と失奴いかり。後
立といへた詮なし。其年も既に明て。二番目の姫おたみ。
十六才に成るを。婦にこりて湯侍の鼓打。華の何系と

ゆうんへ所付。三番めおとみ十二歳ばかりも。内に重き。下
谷にて去大家の御家中。笹田鞍負五百石俗内富へ。縁元年公
に出し。末子表右衛門を家督と定め。年月を送る内。表右衛門
十八才の時。御先に当親お果。家督お遠なく交れて。其に
表手和と名を改。親の仕にせし商買。かしも油断なく。方
こをうけ出れば。年くに仕合よく。拘子にまりせ迎在
を隣あるきのごとく思ひたるが。或時上君におもむき。侍
買れて一日の逗留をいとゐ。かしおそうりしを。筆血氣
にまりせ。押て熊谷の古手に居うりたるに。ちや日も着
られど。時しも八月十五夜の事なれば。月を仮りに来る

所に。儀に夕立雲霞かさまり。其間に如て志のをつくづ
くの大車軸。南無さんがりとうろきへ走りかるが。よふく
と地蔵堂のあるかた。走り込で晴るを待所に。むかふより
も春本きあらる男一人。走り来て同じ。地蔵堂へ這入休
居たる春之情をみて。扨りしからぬ大事ありと云ふそ
春之情去ばゆと言へて。火を打て煙草呑かれば。彼男も
火をそらひて たぜこ呑居たりしが。元来此男は上品出
生まて。邪智強欲の者成が。江戸へ年公に出しかと。身の
まゝりもなけ出ば。能年公も成がたく。一一先生へ詣つて
よいるもがなと思ひ。中もどりする折なれば。春之情が

絹荷をみて。儀に欲心きさし。兄を見て大小身の取りを
捨へば。あつたれ抱へ人をさべしと思ひ出しより。そこと
春之情に年をゆるさせんと。心安く咄仕かけ。不探なイ
扨。最ホも江戸へ年公に出て居れが。親の年忌にあたり
ひ居。中房里殿をなり。おしつけ又江戸へ発りけ。其時分は
お弱かへし。なさけかけて下されよなど。実明律義に出
かけて咄す内。為も止ミかれば。春之情もそこくに挨拶
して。絹を背負出んとする後のより。思ひがけなく荷を見
らへてくつと指通せば。あつと斗身もぶへしかるを。押
倒してそく免をさし。死骸をかたづけんと。あたりを見

ゐる満月。堂へ指とえ。地蔵堂の面容。ありくとみえ渡り
ければ。何ゐなく お地蔵。かならず沙汰せまいぞやとえ
とり云いふ。地蔵堂。生るかごとく口を明せなひて。おれ
は云ぬが家云なとのなふ。そおそろしさ身の毛もよだ
つく。死骸も重まく推重。給引ひさげいつく生なく延矣
なり。翌日雨の去死骸をみつけ。ざんざん陰義の上。憎の
怪面に。江戸本郷給屋喜三郎と云出付を以て。江戸の沙
汰となり。喜三郎当を詰りし。家来武三郎呼出され。死
骸あらりければ。兄非もなく本郷へ持ち先湯嬬と下各
へ知られば。おたみ不迷来て。大におどろきうなし。此所

へ。同じく下谷のおとみ。けころは笹岡鋼屋文姫死後にて。
性なをが妻となり。懐胎なりしが出生もあらば本書に
もなをるべき相手なれば。案抱にて来り。兄弟共に難き
出むといへ共。ゆしぬとなれば兄非もなく。善抱不吉正
なへ送り。又の墓とあらべて。祈ん法に葬なり。村喜三郎
詰はしばらく。武三郎に詰は立させられ共。公根ならし
ゆらさる者なり。いとまをきし。先年おきぬ結につれて難
笑に遊し。洞庭桂左衛門は能美者と成れば。兄を喜三
郎分として家督を立させ。別喜三郎雅名喜左衛門と名
のらせけり ○ おらが婦女三人ごさると呼ひおせしは。

じ喜多郎に聞せて云出しけるか。但し死失せし喜多郎
にはなくて云ふるか。其後はまかり難し。家に湯鶴の姉
おとみは。史におくれられた。十六才より元十年あまり
も。又別時なれし鼓勿論。史存生の時より。稽古して面も
なくはは。自身指南せし事度々なり。史にはへ今後家と成
ても。史におとらぬ鼓の上手なれば。門弟を立て職分と
せり。扨又先年貞蔵せし熱鬼のおきぬ。昔八と一つ所に深
川へおをむきられた。相津にて新たる女人の志六ヶ歩。
所屬々の所家来にて。其詮義やうせしく。其うへ手疵相
苦おとりて。其公も如がたきなり。おきぬをさらきて武士

を止させ。家身系計れて人仕事。其手深おとられば次第
に世の廣ふなり。世びに行者などの伊達小袖。風流に縫
立てやりられば。是より熱鬼がよひの小宿とぬて。後に
は勿心の志をば。自身つれ行て先をうしらく。或は粋な
族も。一座のおもしろきを語ひ。無理にこのこと同ぬを
ろ拂。後には女童及持と呼れ。身上ひらきるなく。其様ふ
とんの上に史を寝せて置す。是おをや女一つ足と云へし
○鼓が上手童及が上手とは。是を云ならん。結るに今○
十月六日は。祝文喜多郎七回忌に当られば。年来心にま
かせざりしが。今は愁も角もなれば。心のおよぶかとり

宿まで追者仕書し。南日にまれば。青面ちく氣絶し。但打
に対面の上。下むりしゐし抱住お涙。扨明日は釈文の七
回忌に当り申候。不孝の私当釈のお果し出しも存ぜず。た
るかゝて風の便に承り。いかゞかり出發結合に存候。せ
望てんたかり此に廻向料。差ゑたしと懐より五四すれ
滅に分に過ぎる艶物。那に安田孝八として金子以上。是
も香奠と思召おうけなきれてと言おせば。但打先年の
謝礼とはおもへと。是は香奠には過ぎり。うけ申すじと
詞さるゝ故。其理に是亜時見して立お墓へ来り行んど
ろに仕掛み。立上る所へ。湯傳のお母み来り然つて新へ

合乗に望るおをうげなりし。見忘れぬ相もなく。おまみ
は思ひがけなければ。あきれて抱も云ざりしが。恨のあ
まりもしばなく精をむくにぞ。お結も云家便なく。志ゆく
と立出るを。こしまた志ゆんせと呼んし。おまへの心、
も七年忌をもひ出さ志ゆんしさかと。清りり云べ史を
志ゆに。思ひ出せば社来りたりと云ことを。それなりまぐ
人らしひ所がござんをのと。是お清りしの口上。むつと
はそれとそうせぬも理と。心て可笑して。そふ云るし
がせつなさに今を一寸のうれに連絡もせざりし。云な
りしゆへは大事此日なれば。笑やと思ふて来りたるに。

あまりき法い云相じやと。うしみゝとてば。おさみなし
くと間をこがし。らふ云もなたしが口でいござんせぬ。
さふの紅のおつしゆるとおれせ。二夕枕の所病中。所法生
の後も。手を出し足を出し。弱ても志れい社。そそやおひ
切て居る所る。又此度の才がる。口おしさ重高さ。何を云
も妹お前とおさしたつたふより。心細さうよりなさの
あまり。おまへのる云出さぬ日もごさんせぬと。流石志
んその血筋同士。徒も志りつもりまり。お後も間ちら
ひながら。そなたの恨ゝいちくむ去ながら。ならいとて
も実の流れて家出せしよいあらず。捜なき筆理に引れ

しるまれ共。口へ出されぬ訳なれば家身に恥を引うけ
たり。釈迦所生の間も幾度か所所法卜さんといふひ
しかど。其時分いまる新もないまふり。かゝ後ら鴻もな
きよなびきるかと。一ツいそなる気にも恥かしく。そそつ
とくと時若を待間。ついおふたりながら。後で此々の事
出しさ。悔しぬるを泣てもつかり。そふ丈からいとても
所葬礼の弓もあるず。こちの躰械もまたら称べ。仕合れ
恵るとと一年をぎ二年立。ついそふが日出でかんに夏の
相なる。更いそふと才がるの口惜しいといふ。心えなしと
弱れば。まづ所なきや。聴谷で殺されたりと。此なりも

つとおどろきしが。扨もくむごいす志たり。何志の仕
ようぞや。よしく女で往あれ。手掛りを呼ばし。歌を乗ん
と遥を唸ぬ。手を握りて云はれは。おさもよろこひ
そふおのしゆれば。ようしもちろう。孝ようしも鼓の指
南。大勢の弟子流あれば。付合も唐く所々の噂を手を付
て呼おそまい抱てもなしといへば。おきぬりなしつ
親父。女童の持と呼ぶ身。あまたの人に付合へば。呼出
きぬるはまはじやがて歌はれてゆらんと。喜ぶれが石
塔にむかて廻向する内。黒持の樂物に。下女等嘗へき。ど
やくと緑廻で去とやうけ出るは妹のお前。そさ図芝居

の金箱とも云度くらひ。能ぢりめんの弓箱。りく立ぢか
り姉に地紫の袋の打うけ。壹人ゆき斗を傳唱の毒指。へ
ぎをもつて袋の様を指。風流をすもなるす。あたりも
親く斗なり。去ばむりし云とりれ貞女をて。虫がいたき
とく顔を志りきるに。いとゞうけくしうければ。悪女が花
をたく。うくそれば見ようきやとせひ。家も親を志うめられ
ば。二ッ目とみられさりしと云事あり。伊達風流なるも悪
女のそるはうへ行てみようく。貞女のそるは又指られを。
じお家は性好の艶れたぐ云まれ女まで。年云せし時
さへ伊達を好こそるが。今は蕃の奥りじと呼れ。いとゞ

風流ちとくまて。こゝ名を津にうくれなく。下谷一番の御
奉行てござるとの評判。お給おとみも能打うと。ちの
庄兵ての對面。十年以来の抱經法師笑つ。津に姦しくや
時うつしてぞ別れけり。不義にして寄。且貴ハ。我におゐ
て浮盛る雲のごとしとハ。聖人のいましめ。熊谷にて青
情を料殺し。給をうばふ。ゝる男。別ち清のめるひにて大
小身のまゝりを立流に稼く。其人を取し処。不進お家迷
合逆田左近主義へ右抱られ。中嶋弥源治と名乗て。別た
近下役をつとめて居けるか。邪智ふかき志左衛を勤て
もあぢをやり。こゝうへ諸役人におも得り。へ津しい所に

立身して二百石まで元上けれハ。今ハ左近下役なら孫
どゆゑり下役せし時のとく。君に心安く来て慇懃にし
けれバ。左近も家特なる志とおもひ。如在なく懇意しけ
り史のみならず所厳向のお合。或ハ朋輩の命合にも。左
近を見込頂して第半に付ておし立けれバ。左をうきりな
くよろこび。兄弟同前に他事なく志しみけり。柳。弥源
治かくしたしくなる事元を弱れハ。お留に意慕せし左
ありつゝて年月懇意なる内。家内の志仕度なれバ。弥源
治笑ヲ訴伝し或ハおとみ拝さんにまに出んとて新ふ時も。
左近志ぶらぶられハ是をもて見て仰付させ。何うに付

孫源治まくてハ叶ヨウ[illegible]ふ。家内の者ハ[illegible]ひつ
りせしハ。母おそろしき巧あり。去りるに或時。九近吏奴
と孫源治と。菅合より咄し居りるに。主君の所用にて夜
中まづらの酒一門方へ来るへき義を申来りければ。[illegible]
ハとて仕度し孫源治にむかい。細夜[illegible]ハ帰りハ[illegible]。
内の者も淋しがるなり。吏まで咄しまへと面。さてお前
に向ひ。中身なる濁麺お来ハ汁に出し。酒をも[illegible]ド池を
設されよ。酒身の為にハ大きの桂山の。[illegible]押人なり拓と
[illegible]もれてお詞なり。給ひてお買うんめん酒をも出し
[illegible]へまて指向に咄しけるを。人の名の会と申ハ[illegible]

壹
順

古實々抽論

再板

三ノ下

なりので。夫ーたを作るよりの方。いくらも所家伴にあれ
ども。かゝへて今は恵く歩。そまたなとは乗るもあら
孫ど。うく志さしく致され。ようはまでも仏壺なくなけ
す。先もお世の約束でがねけりんなどし。志しくとして
物語に。旅糸口と神先て朋まず年頃の悪仏。小夢に聞く
近く指家。家ぶがかくかを受けるはさど。そまたなをかう
りにおもはれん為なり。まづくしけ上命ありとも所用
に立けるんと云ひるまで。おとみ何とやゝ庭食味なる
き焼杉とはおりんと。そぎと産具に見ましまたき
けいおなぶりと云へは。イヤ当てうとつはさ義なるにお

らず。其実に意まいらせば。ことひ命に及とも。元服にはし
意ゆるして貰ひませ様が故ゆさずと。其報に故て云に
をおとみさを正し。故は其実唯今之の所願意は。私にお
心をてのすこそ如や。先以来は。去ながら男のなき身に
てもあらは左作られまじきものにもあらず。左近とは
史の御私。たとひどふ故とても。意をかなへ出せんとは
故ゆまし史は近法をなる国には所合ませぬ事なりと。
法所なりと和しむ也が。法源法も詞なく。しばらく指う
つむかて居たりしが。故程所なる猶。元より飛鳥合点で
ゆ出しに拙志。おす入なれは力なしと。行灯の姓名を

ゑて刀をしごきなぐら。相は無縁にてきしかと。知らり
云して鞘におさめ。そのとゝ云て呼んとするをおとみ
引留。根を又合させられし所の座の詞をと云が。去ばは
先より恋に左を度お呼りを待史。付果を不存と云ふ事
お留左見史し所作なり。史左近に何の恨はや。日比の
所願意にも似合すと云ば。日比願意に致せし左付果す
なり。家に今ゆせしなり。左を度にあれていどふも故ゆさ
す。去に依て左近度を付て。家にも切結致不存と云へば。そ
の事ならば先待まへ。呼るさいはしはいふ。しはい
さへゆさずは。左近との知りなへき様なしとゞむらに

そ。孫添おゝ一番生て。あゝ。これ程さくへおゝ口で申吉作られていゝ。爺ハいとゝ笑ひをもて孫うんやゝ。おゝ〳〵おすなゝ云ゝで。鬼角まゝ太るとおもふ。ゝ。老婆共心ゝりてゝ。これ〳〵そこのそ生せ。今爺そゝるさ自作〳〵れゝる。ゝそ口へおゝ〳〵ト半ゞ。爺ハ半俤ゝ。ゝ小ゝ扨紙。別て氏神のゝ罰をまふ。ゝ。あ果ゝそれ覚る獄ゝもぐさ。ゝ扨ゝうゝむせゝきゝ。ゝ。ゝ。ゝ。孫添ゝ。ゝ。ゝ。

さる　おもひをさうぐ。　年月打ち過ぎ
ぬべし。　まづ　おのれ吉正寺の住僧ハ。　碁を　ひく
　　強くおぼゆるが。
　　日又おそはしよ。　住持おそ
　　ふ。　彼おやぢうち　碁をうして　酒
　　下もれ　碁をうして。　荒垣の向ふへ　赤くうつ
　　ちいさき　石を　奪よ　今一つ　打とゝもれうり。　まこと
　　云ふか。　イヤ　尚　対局人と　なを
　　夜の内宝なり。　碁盤おし
　　かな。　れ　碁をうつ

て。知ひよまきらして仕出しくれ。孫源治はましめよ如て
侍りけり。かくて数日を経る所に。時しも三月初めつかた。
人の心と深立比。たを書おとみ。明日は上野の花見に出
とて。肩より兵尚の用意なくしたらを。孫源治嘆て急吉
ふるく行て命を惑を呼いでし。いつぞや中精に申せした
を内室の事。家に来る事をなかりて侍りし精におもはれ
しか。又此頃も其咄がおこるに付。中精の申されしるを
云ふれば。詩の外のようとびまて。何卒折もあらば出合
申度との挨拶。志うるに明日上野の花見に来ることに
付。家にを訪そうに呼れ。彼人に一献くらしく。よろしく

精入との事。如程其後は請合申とて。惑さま見へ来たり。
家に花お申せしを。侍りなき説は明る社知べしと。其頃
に如て云ば。高く惑迷惑そうに。其元の仰られしるは。
雲にも実にも彼せ。家に先日申せしるは。深人の酒のこ
のたを云なり。史をあの方へ毎ぜられては。去りとは迷惑
無筆。粉更明るは侍来るまじと云へは。孫源治彼を立。史
は何に嘆くぬる事。其精のこなかれと云る家に志らず。実
に思ひ新造び社。うく申されたりと思ひしが。先へ再し
たり。今更こそ云でござると云て。身共立ふと思ひ。そる
が酒くらしたるとて。科にも先にも如べからず。主

其女と愛すなと云法もなし。先雅は明日はお出合下さ
れ。こうゆうへにも此物仙なれば。先雅にうなるす百年
同。其栖と付果をより亦なしと。きつそう勢て刀を知称
くれば。高々悪魔きみなるく。ハテ先雅とも来るまじと
ゆにはあらず。夫程其云の所雑年なさるなならば。此
程明日上野へ来。一ツ勘くミゆべしと云ば。しかと左様で
ござるか。何が扨程ば来いと。縁に笑臭つくり。夫ならば
上野にてのせりふは。家ホ更丸て来り。かく酒肴もこせ
ておかあられ。あらず出合さる神にこせ。先はよき所に
てなどく。挨拶一無り酒で。扨かく兼酒を持来致さう

此名足はきまゐが是上致しさしと。其栖の方より仰う
けられよ。先が判あの方此粗なり。女子其下頭も居るな
是ば。左栖ならてい。其坊がよろしからずとのなりと
云ば。如程仙様にと云時。弥源治くり西して必ず遠なく
粗入る。判限は何の方を九ツ時分におらるれば。其云の方
は一下時もおそきがよし。先で家ホも安坊志なり。私よん
なるてをでのる。大事此命お手に何やうひる。先しやふ
依て刀がいゆでござると。唱八百云て立くりけり。翌日
になれば。左近方には奥国此花見のふでと内中さで先
き。例の花簾人なれば。下女獨えに到るまで。花々数出立

一子力士師をつれて。近ければとて歩行まで行ば。往来の業繼を誇らぬ者もなく○下谷一番侍達者でござる。今年初て花見に出たまやと唄ふは変なべし。時に海源治は彼等ちへ仕かけられば。左近よく社来ありしか。内の者等ちまで淋しく。嘲しまへといへた。いはもに誓りて。何かくつたくれを桔子に見出れば。見とがめて雲邊ハいかに拙思ふ神なり。いかなるぞと尋れば。思ひ内にめれば色邪に影なるしと。何に無るなれば隠されぬものなり。あかせば人を落し。隠せば信に背く。志てうに無りし業が何。此推量下されよと。かろりとこがす一志づくは。

何ぞかりおしさう仏元なり。左近更に合長出かず。雲邊でもなさまい。女ならべのごとき振也。何なぞ云まへと云時。いかさま兆を清んで信を失ふなれば。聖賢のまくむ所。朋友の実には整られぞ。思ひ切て見せやべし。侯何なりと隠便に彼さんとを。此誓云を承らんと云ば。何なかれ志らぬ。雲邊の神慢ひるとは思られぞと。刀の鯉口志ゆんといはせ。さらばと云時情ろより。彼おとみが誓付給先引裂血に染たるを見おせば。左近見て見るに。前いつなるに能ていと云より。神くをおとろりしたる親達文。高名はきれてとみと歩。横に見ても竪に見ても。如屠お



爲が手にすぎれなければ。右近大におとろき。恐ぐらく物も云て居るを。弥源治眉を記そめ。此夜去れ所にてひそかに接ひ取たり。尚名と家を引さゐるは。家ホガ有芳源使の沙汰を新ふ在。此外にすぎ女も在。明日は上の世にて美奇せんとのる。是もお国にかけて是なければ引裂捨たり。かくてお爲女捨山ホに出らるゝ時。家ホれ持て其公へ勧しる。今更手の毒手万と云ば。イヤ更は其道にかぎり身を銀ふ心更になし。何にもせよ不便如ぬ女めと大にいかれば。其お後立所を取極。他邑其明白に詮義志ありぐ。一ツハ外学もいかゞ。一ツハ生死にもおよふとき



ハ。まつ〳〵 家あが口先て人を殺なり。彦の狂り出家左
今と双痛をゆえ〳〵と。むらしきなり爲立て云よ
ぞ。左近ハ一途に孫源治を。よき者とおもひ込しも無理
ならず。志ばらくきて孫源治。先何なりせよ出面の無り
ならば。今日必子細きべし。家おもお供中人。上野まで見へ隠れ
よお出ゆられよと云よぞ。実に左と女人。深編笠をかぶり上野
へ赴き。山王の後の方に发抱一枚かりて見渡せば。お家居所
より二十万斗へだてたり。然るに法保川多く黒孫源治が編来
聴心がたく。迷惑なり僕に酒肴を拵せ。ぶらくと来りてか
しこえ迎て。史と見るより 彦家て小縁かど先。先ハ花作

一説にや。家にも見物に来たり。誠によい家をよけとて。
うたりよつくがりて居れば。いかぬ者もまたぬ都
しては居られぬ。志ばらくお縁かけられよと。云縁がな
らぬ。扨家来に持せし酒肴丸寿。此家足はきまじられた。
廉酒持来仕に。一献石にられ下さらば。家と云ふを。何と
やら無意無らしくは思へど。是とてもきまじきるまら
縁が。更なりけりの挨拶も。さるかのことなさからは。身ぶり
沖山しく酒くゝうもす体見とぐけて。扨は此歌の女に
遠ひなし。あがく見ぬ程酒屋の云縁。いざお帰りなさ
るましきやと勧るなぞ。来深らしく見ても居られぬ。打

連て帰り さ奴係深治。見別も下ごとく。此不縁は名前。此
絵筆は此無用なりと云ば。ハテ無癖なるを作らるし。これお
きんてう致せし上何を下べき。すまを論ぬるならば。ま
ざしも。性な説拠を上る。こしかに見座下なりとて。いそ
ぎ宿へぞ帰りける。亦ゝ悪は係深治が云しといちがふ
て。どうか嫌ちがな体なるな。あしまして別れければ。
まて扨あつかましいお家庭も。きりのかなとて。笑ふ
て仕出けり。路に雪日も雨にかたむけば。いざ内へと皆
ゝ打つれ。ざんざめかして帰りけるに。さや前にハ右迫
下付て家物おし重。其意様な情つよくもあけさてぞ。是

[illegible]
[illegible]
[illegible]

もしこゝへ。しきうへ。ゆくるへき。そ尾ともならば。幾主は
もお私持ゆんとよろこぶ。相よ云ば。あんたは此上あがら
ぬとんは粗まいらせるといい。是ぞ御に佛形んて地獄ぬ
べし。係源治いとらく。きさしく入辺ぞ。姫はいロ説度さ
んと思ふ心なれば。席あがら鼓の弟子と成て。度く辺
ひけり。其度毎に左近方の事弱るといへ。とうて其堂
の西巻なきと斗云て引きり垂るが。或日来く相く
左近と云。男。見うぎり果たる男なり。今まで狂んごろせ
しる。今更とゆしき根と云て殺されいいかゆるぞとお
たゞ其に弱る時。イヤ別いるもあらず。けるのる幾度も

西巻なきなり。家にも行まり後か立ち。事にのらぬなり入
らぬ。秤がきなるなと。二つより一つの西巻ハ其筈。家にあ人
の扇より粗まれ。幾度も同じ西事ハ成難く。とふせらるゝ
ぞ其西の西巻。今日吹きしんと可笑極めて申たれば。さ
らば見せる者あり。家につれ建て来るへと云ひ。合点
四ヶ様と同居して出行ば。体栄倩所の表西りに。家繁成
家次接へのきけるが。そこを明て這入れ。家にも續いて
這入えられば。相も更しい女。かつらお光の袋。丹花の唇
鼻筋西て。ひとくまぶら。爪ざ○奥に雲をて徘しかし
を。増婿とこおゆかにして。私晶に紅をふくみたる気合。

容貌端麗なるゆゑ。あたりも光る事なれば。あまりの事に
そこらに羽衣はなきかと思ふくらひ。巣の縁は十六七
とみへて。紫志がりの大振袖。左近はよると言まゝ稀しく
あたれかられば。ふりむいてこうこうと笑ふこゑおもか
げ。むりしの衣通り姫とやらはみぬ事じやが。おそらく
世界に又をべきものともみへぬ。さすが此家にもぞつ
として。志ばらく抱も云ずに居られば。弥源治見えなく。
とふしさ若を垂て古くさい女房が逃さ事ゆうか。今よ
ほ左近が奥相は見ありと云ふ。家ホ一云もなくて立ぬ
事たりと。半ざくしく咄せば。女人共に志ばし間もな

くて居たりしが。やゝきておなみ。夫でよみがきこへ。
つけべき科がないまゝ。今まで逃音もなく引ぎり来しと
みへたり。そう云ふ鹿の人ならば。源てうらが嫉しくな
いる。ノフおなみはおもやらぬかと云へ左史に逃音なく。
さしうつむいて居るばかり。弥源治は志たり奥。家ホも
左近とは懇意も見かぎり。ふ鹿の定らぬ男はおもしろ
からずと。おと白もせて煙り悔にかく酒。おたみイヤそれ
はそうと。ひふはとゝ為の命日。墓まりがおそなるると
云へば。弥源治吉正ちへ出なし。家ホも同様さん。奉
をおに来ると云も実はおたみと連立。見をがら咄して。

おとゝみを取書よませんかなうべからん。左あらばおつれて出りう。経こゝのおとゝみ母ちをこのむと。かの女おつれて出りう。経こゝのお寄所にきれうと。もちやこのそれ娘枕わ。例ある祝引よせて。こまぐと出立おし。ちごきをおれて深よおうみ。陸よそ綾んとする所。仏保川辺うち忠兵も敵の矛みゆが。男ちうそ名あぐう急あて戸を叩んとをれ共。何うちやでも

花ゑの花。弥源治くのごとく申て家来をやりたりと。
其時の事たちまして所望へ申やと云へば。お冨おとろ
き夏くおがへましと顔を赤むれば。去れ社千日の精子
家来も心得ぞ申なり。是をかつて見る時は弥源治云事
は誠にならず。然つたるもやまりおふなとなるめとぐ
むらあん。立くるおたみ。なるて深川の幸八更姫に御合。
同居して居りけるが。此事を聞て大におとろき。相く
あやうひ事。市之悪道よく当てありしと礼云て。相今も
是秋婦道所更姫へも。是く咄しけり。弥源治及ならは
とちまでつれざらしたをとがら。そもやとても此を方は。

縁も縁も切果たり。これ行よりて おとみ及を家来方
へあらひ申たし。当分は其元に親立。主人を誓て引丸申
さんとのるとなるせば。お冨。弥源治及ならはに心なる事
はとふから此事なり。子細なて仮はなされず。何しに
再び男持べきや。ことひけうへ生なりくるとても。尼法
師の皇より和はなくはと云へば。なら忠弥源治が お冨
を貰ひうけし仲。弥源家に思ひ。先達の上聖此一坊ぶれ
もへ委くなれば。幸ハ始終を聞て。是は其弥源治と云
人。猶に一抱なる極河たり。家来邪雅が志る称也。お冨及
に意慕のんなとも。主人なれは心にまかせど。依て中

を裂離おさせしと見抜こう。何もせよ孫源治を呼よ
せ酒を整てもりつぶし。[illegible]る時分よおりしろおら
しく回復してゐられよ。大方は遠ふましと云ば。たあら
ばとておこみ現引させ。気安此所を取しお家へ申ゆく
ば。大方好仏まで。夫よつき今春は深川の婦も来居ば
へば。うさ先うさぐ所出酒一ッ上ゝ進よと。付頭よ出て孫
源治方へ送りられば。大よ喜び其倍息を切てそ来りけ
る。事ゝ患と幸八は一ト号へ志のぶ。こなたの三人は一ト通り
里此挨拶をるかせぬ内。もや酒にしてやつて呼しつ。人
ふ吾をすはお給が名人史おゐ又おさへ。家はお者とべ

つこうとしさやりゆをで事をうかせ。吾を程よく。おそ
は三人手あはむとう。洋よ上手よりうけられ。うつ
ゐよ如てイヤハヤ。深川の婦ゐは又名別。所酒此おさきど
あもいへを。お名はなんとか。それよおきぬ。おきぬ
とはおりしろい。其よ痛て居たい下仏と。くざをまきく
イヤうなるを近き内おこづ子トんと云ば。成程所弱りさ
れませ。け弓は元をけてを所此ちの地蔵ゐ。異論あらさ
ふましく。獨抜がうつさの所所とが直つさのと。おび
こしく人鮮集と。何仏なく云ゐるも。こが伝ぞるゐよ
里。不思議の事を呼出す。先も利益と志られこう。おこみ

例よりおんに奴なれど。けしきにても手を沙汰。去ながらど
ふも合点のゆかぬにて云を。おきぬが句神ありて云ぬ
もの。此利生あれは遠なしと。おかしなるを云合を。弥源治
引れこりや婦女のが此利生ある事いきのでもない。
家に来る地蔵のもの云れを吹こ男と。吹ようおとみ吹
出し。其はあんまり志らぐしい。美物語の枕神のとれ
あまりしきるなら孫ど。来る地蔵の物を引しゆるとれ。慢談
本にもなひる。そふしこ嘘をおかしゆつてい。粗りし
くごさんせぬと。そろくと崖まつしにこそを吐を
ろおめませぬり。あぢにころけて手も付ぬ。歌の出れし

もふしきなり。弥源治は一筋にお笛におもけれ人中な
れば。毛頭はれら縛りやさず。こゝかれて何共迷惑う
そでなひ説授。年来色しるなれども。あらう尺上し
十一ヶ年は他人なれば中なり。来四年以前。志らも八月
十五夜。熊谷の地蔵堂に休し和。今一人休居たりし者と。
不思口論を仕出し。其者を指殺し。立退人とするに満月
地蔵の奥へさしこそ。ありくとみくれば何人なく。お
地蔵沙汰せまひどと云されば。其時地蔵の。おれはいるぬ
まれ云なとのあひたり。人を殺せし程の大事なれども。
縛らぬと中説授に吐をぢうり。決して吐しは此死ぎり

と。此より三人同を見合せ。其教されし者は絹賣ならを
やと。おきぬが云葉にきよつとして。夫をとふしてと云
んとせしがちやくと云惡し。イヤ絹賣にはあらをとゆる
うふ皆る顔色ふ。三人同を捕へてちんじてもちんじさ
せぬ。四年以前八月十六日。熊谷の地蔵堂にて討れたる。
絹屋彦之丞が婦どもなり。牙の歌のがさぬと立うら同
て追ふ事はければ。シヤ志やらくさし絹賣を殺せばどふ事ある。
ゑがおのれ不ごときに手ごめに垂。深深浴ぶと思ふか。
三人共かへり対じやと刀おのとり立あがるをうしろ
の屋紙蹴なるして。飛で出る安田孝八。深深浴が弱腰つか

んでもんどり打せ。のつかつて縄にと呼に。高く悲細し
持て出来れば。高手小手に縛り上先へ御屋敷へと人を
走らせれば。早速ゑゆる屋敷の役人深深浴ゑと此より
も。左近も續ゐて飛来れば。孝八始終をつぶさにかたり。お
のれが口より名乗し歌。其より性な讃授なりと云に。
屋敷の人々も尤と。外云ゑなし。時に高く悲深深浴に
むかい。其方は能いつぞやまつかふ〳〵縛りて。上野の花
見に乗をせりしな。今日きけば皆其方がいつもりこし
らへなり。それ也へおとこ故不縁のもけも。其方が誅
ならんと推し。今宵呼でそうし落さんとおもひの

和歌まで志れて兄弟此庭にいかぬ仕合と云ふ。おとみが。さしあてそまでは包しが今はおもひ切て云ぞいつぞや右近殿爰ちよ。ならはへ不義を云かけ。承引せぬとてよくもく。夫右近殿を頼そふとしたる。皆人も出て云べ。其時のならはが出しさ。然ようそがつて文くと絶しされば。そんならけるよ云まいと云。誓詞をかけと云くさつた。口情くは思へど何を云も夫が大事さ。但まも先ぬも志らぬ誓詞とゆる。文云まで重せて。出てきしたとうらめしげふ。右近が方をじろうとみれば。いちく安とう右近が仰天さてはあとさき引きひて。おとみが

起請とみせたるは。其時の誓詞か。三重のまも今きけば皆源治が練斗。さてく不屈千萬。よく今までざましたりと。あらみ付て立たり。主君へ右のもみ上をまたらう三人の婦どもへ。源治をかされたれば。おもひの絶り歌を付掛きうへまて。右近うたよりお家を呼んし。同出度業へ。ひるとまつり

臺
唄

古實今物語

再板

四

唄古実今物語巻之四

姫君おせんの方の事の始

おせんや〳〵おせん女郎。持なる此指なる筆は。黄さう
黄たかうはくしや。ねもせぬが黄もせぬ。方宮内夜
の一むをこ。女房が泣てまんきする等。兄も陸奥より唄
出さしるなり。頃は元弘二年の春とかや。隠倉の武将。祖
模入道高時公の嫡子。長崎三郎左衛門の子息。同名勅解
使左衛門為基。時に十一歳。器量者柄人にすぐれ。武勇と云。智謀
と云。隠倉宮雙の男ありしが。高時公乃一族。大佛出雅守
の息女。おせんの方と云が。時に十七歳。勅解使左衛門をふかく意

福田文庫

俺のひ。おとうせへ。とふふれての女玉川さ。動解由たる
もいまふいあら稱ど。朱の釈れ由報さゞるをたゞかう。時
芸もあらばとの西る斗まて打通ける処り。女家れ
釈迦此る紙しりたるあや。但し打度如にまうせしか。嫁
入して姉に世ふ世ふの物来打濕結納を送て。日を定むる
一段になり。朱に一日くのとけしなさ。仕度も手續ふ
先送れうしと思へば。姉所は猶文如ふことなら先家身
さうり先へ世ゆて。仕度は詞から此朱に送てをら
ひといくらひ。身内がら薄くよふなれど。そふもならば
雑文女家大身れるなれば。こちらでは蕾清せるれ。あち

らでは穏く相くれ諸君具古ふても大事ないを。とざ
と形ゝに捧へる。上くは各別なものとて。ちや川とで
は埒のぬゝを。三月年も暮て元弘三年の春になり。諸国
又軍初り。楠は金剛山にとて籠通ば。赤松は播广に籠を
上げ。備後三郎名和又右郎姫起して。四国西国傍く都六
婆羅に切川なく。此時なく。上方は須進橋の墨を引ご
とくなれど。時政より粉代の繁栄。一門諸従日本ふにて
びこり。恵の守護探題。魏々堂々としてあ通ば。更にて
とも志たまるさ報知に。思ひも寄らぬ美貞と云虎物。足
元より起て。越後信濃上野武蔵木の條をおなひけ。徒な

く大軍になりければ。秘て攘御初やし。猿舎の諸將。一弱
尚ほ此人々を見向られ。ふせき戰ふといへ共。日々に軍
利なく。今はたゞや猿舎表へ。稲麻のごとく死なせ。仆韋のご
とく元囲をなるいうことて、かりけるなさゆゑなり。是候れ模
入る夜の行詔。人皇に背し故。泰時時頼ホの賢君。子孫此
為に積惡出し。積惡乃余慶。唯一世の惡逆に削なくせし
ハ。誠に一人貪戾なれハ。一函礼をおこそれいましめ。維
しもいまへきなり。此礼故に動解空なきも。中々嫁
礼不にあらず一方此大將軍ハ更れてこつかし変彼馳
合せ。数度高名手柄を顯手といへ共。天より負しあふ

軍なれば。手伶なく。味方ハ手負討死されば。丈きりまて。
歌ハ日々に勢ひ増。既に此月廿二日此悪列にハ。義貞乃
勢ひ六十万七千余騎。味方ハ十万に足らず。諸史
ハ此の軍ハ。猿舎滅亡の一戦まて。諸代主悪の人々。命を
塵芥よりもか諸んじ。名誉おしミ勇戦振て戦へ共。安手
ハ国に余る大軍にて。何ゝに歌をべき。変彼まて。猿舎方
此諸將討死しあへば。けるに坂小袋坂のうちめ一変に彼て
歌猿舎中へ礼出入。清表より火をかけられハ。折節魔風
志きりに。車輪此とく成る黒煙の中に飛ちり。十町廿町
が外にもへ付る同時に共余ヶ所なり。煙の下より安せ

手の云勢ひさうんり。度を失へる人々を射ふせ斬ふせ
られば。煙里に迷ふる女童べ驚騒て。火の中城の庭とも
云ず。花入り花迎ふさまは。語るに云葉も更になく。衣な
里ならでせなり。去程に余煙四方よりふきかけて。相模
入道殿の屋形ぢかく火かりられば。今は是をと入道殿を
始め一門の諸屋々。かさいか谷東勝寺へそ除れける。是は
父祖代々の墳墓乃地なれば。是にて自害せんとのるなる
里。長崎勅解由左衛門は猶是をも。自分の指口橋東寺の切
通しをふせぎ支へて追つかしけ。彼らも遂に居たるが。歌
の緑の夢院に後ろに雪へて。御屋形に火かりぬと見へ

しかば。お路に去る七手余勝をば。往元の寺口に踏しき勢
六百余勝をもくりて。小町口へぞむかいける。義貞の云
是をみて。中に丸迎て討んとは。勅解由左衛門諸幸御下
知し。魚鱗に法らまりていかけ破里。虎頭に列迎ていは追
なむけ。七八度が程もと合られば義貞の云くもで十文
字にかけちらされて。義貞小語へさけと引。されば寄せ
手は十倍の大軍。只幾度も竟手を入替し丸囲られば。
今は諸に廿余勝まで討なされける。此時為奉乳の人の
良等。藤崎半平にむかい。諸会反定めてうさいが谷にのか
せなん。いかゞならせなしや。汝此囲を御破て。一下先へ見まい

らせて集べし。云はれば。畏てかけおしが。百重千重此
囲の中。出べきよふ社なりけれ。さらば今一当里あさ
らんと。どれ[illegible]おもひて卅余騎貞勝が中にまつて入。縦
横無尽百術手段。為基がもいたる方へおりしげと名
付て。末右衛門五行が。百日精進して百度にて。三天三年に
打たる右刀なれば。此きれ先に出る者。或は甲の鉢押む
ふさ[illegible]れ。或は鉤板をけさかけに切て落され
ける。歌皆見に追立られて。呵へて迫付者なく。唯陣を
へだてて。十方より夜の陣ごとく。老策にぞ射たりあけ
る。従行はれば。喜かく往の矢もなかれど。宗たるまに七

箭を射立られ。志り形にどふと倒れられば。見非なく下
に立てあたりけるに。味方は一騎もえくば。唯夜うし
て数年の死骸累々たり。かさいが谷へ来りたる。藤後ま
平もせかくり。縦会夜を袖免まいらせ。此一門御らに只今
此自害はなり。手を責口へ向ひ給ひたる大将も皆々
討死との此事。実にも歌の手にかしらせ玉もぬ内。早く
此自害はへ。此かい志せ仕らんと云はれば。動解中たる
恐縦と。袖をも云はず立居たり。扱は衆情ませなふや
らんとおひはれば。さらば素お先様仕らんとて。腹十文
字にかき切て。同此おに伏しはれ共。狂為奏はえもせ

ぼ。ぼくぐ心におもひけるは。桐梅入道殿の不仁なりく
滅亡に及ぶといへ共。好代極動れたる積祿千余慶あらば。
再尚家御引起を人。此子孫の間に豈あらざらんや。齊の
桓公越の白賊。既に其例なきあらずと。無度心に
工夫して。扇が各におもします。入道の名君亀高貴をれ
なり。いかなもして身を思ひ。時長御待て籠御よん。死は
一たんにして安く。生は安ふして堅く。後石のごとくに心
をうた先しが。かく凡書れたる中。うち立まて出べき様
なく。誰ぞ迎奉らばる御棄りんとおもへ共。以前の手なる
みにうりて。迎付君なく。唯是責にたる斗なれば。為基

ほさと。敵をたぞかりあせん為に。手御願たる後にて。小
膝を折てかしければ。よせ手の中より誰といふ者ぞ。
うぞ引アサリの笠印付たるの十余騎。刻しくと打寄て。
動解曲を持つが首を取んと。車を付ら新所に。かなと記
より。先手の上に騎馬の武者の尾馬に跨がり。手綱無
る武者を書手に居る。打破らんとおもふ方へ。弓技の丈
斗投ければ。是に当られたる武者の六騎。刻時に落馬し
て死生志れぞ。此勢に一鞭くれ。其一文字にかけ破れば
さしも強とふのごとく凡書たる云。友方へさしと刻しい
て。あへて退べき義勢もなければ。もふ其に扇が各に



到りぬ頭倉原の志ひ人。二位の御局御和なり。女房等殿
に御しけにて。扨こいせの中に何と如べきぞやとうらに
女子なれば立隠るゝ方もなべし。此兎来御ばいかゞなべ
きとしたのゝおもひ清いしせく。房のごとく奴家がさく
清ひぬるぞく泣くどきあふ。為奏なれまゝにて。お
心御もなぐさ免なるぞやとはおりく。女性はたかな
きとの。御に付こも御れば。もさと偽りて御一門大蔵御
自害御なり。大夫弁社いまだ。うさいが答に御話へ。兎
来御同見て。御頭免さるべしと仰ぬる。御迎の為来
てはとゆれば御局嫌しけにてさせあひしは有也



然ち志願くとなりせ五ひて。扱ひ子をばいかゞせるぞ
と。問ふむせだせ多くば爲養も罪本なるに。ふ中に出
られた。大事の所と。罷の如くに幸ひ兵衛し。とても逃れ
ぬまじきの身。狩場の維子の業深れたる五相まで。顔にさ
り出され。いろけなきのうち稱に。一家の所名を失はれんす。
口惜くは。文よりは文君の所事に頼られ。冥途を使はせのりん
とのはなりと。云もまて寵ひつゝ。抱兵なり。寵かごく
に跳出せば。夕のと一度にお免く發。紀の者にてかけ
出を者。又むきもせらるに其さがり。一さんにさせば
るが。四丈町がるハ。女房達の泣さけぶ夢ぬくられた。る

御庵せて、ち給ひよへさぐ里ければ。今ハ心安しとおもふ
処に。うさへ如松陰より。為基様にてハおもせぬか。動解
出来つさ母にのふと。女の聲にて声きりに呼ば。ちかし
とおひながら立止り。よくよく見れば大佛殿の姫君
おせんの旅なれ。為基ふしきに思ひながら。何とて女性
のちしゑなく。かく供をも具せずさ後らいのふと云け
れば。去れとに粗ミきくあき世の中となり。父上も討死
者なふとの事。此に年もきへ心も呉。おすしたまもと
おもひしが。せめて此身に今一度。より聖ささ来しさに
あくがれ出くさ後よひしぞ。化出へおもむきなふ。

ともに法也させなくなべしたなくハ手にうけ鞍て起
べ。おりふ人の手にうり。死るハ家身此事重ぞと。ちら
ばがにをがり付。ちなれうさなくてくれば。為矢も悲
覚の。切なる涙にくれけるが。兄弟の大事城かへ。一さん
の色に迷ふべきなやをと。急度ふひ来して。さても尚家
此武運今日に受されば。此家を害しなり。家も今一
度敵の中にさせ入て。討死をする所なり。此身ハ女性の
事なれば。とがむる者もなべからず。いか如人にも訓練
て。家なき所をもとふてさべと。涙ながらに云ければ。い
と恨ミさる風情にて。此身城先立何楽に有へ人。是うへ

いかぬ人にもなれそめよとは。情なきお網かな。唯なほ
うけて。殺てたべと。鍋つがに刻しと打りたれ。誠にせひ
切たる体なれば。止ことなくて効解由を屬す。何身が言ね
底をうて誠を明をなり。何をかくさん我討死する所
にあらば。下先羽州へ下り。身は悲びて此若君は守立ん
とおもふなり。されば日本国皆敵ぬ故。此若君さへいかで
とせんが。猶又此身は異せらるゝ。あらんてあらば又也
ゆ逢ことも多べし。いかにもしてながらへなく。家粮んと
おもふは。お母の城下芭蕉が辻にて。市中あと云ふの。
乳母が夫にて今を同をうけ並ぬれば是を粮て身を表

ぶ所存なり。逃をくも縁をなる事なしかな。今さへあらば
悪び無り逢んを見へからずと云はれば。おせん泣く羽州と
せらは。今を父の和服なれど。是より遠の所と呼。今別れて
いつ無り逢べき。たとへ逢たりた。なるかに年をも屬が。年に面
影なり。何を絶拠に名立ぶ逢ん。此身の為へ有ふ也。自ら
をば思ひ家にて殺てたべと。御に命を切ぬ。いたるし
くも不便なれば。為奏もとつておいつ思ふ和に。若君龍馬殿の
手に持たせなひしは。母君二位殿の弁にて。龍甲に七宝
をちりばめ。いと美麗なる。若君持あそびておかせしを。為
奏無体にうき抱きたせおせしまし。いまさは手をたゞあき

をして出しを。昔と云て若出し。乗に西なげうちうる
共。是を謹授に出り進ん。たとえ、いかぬことなれども。此事
沙汰だし志なりしと。振切てもせたりしが三度と見
えりしは。為養祖の武を情の道には。甚だろに心も引
れりと思や。高天に踏足。原地に躋をとい。罪を云に切
をのことなり。いかなれば動解由左衛門。又は御しき出
義にして。史に一兵の罪もなられど。甚にとえ事未ま
でに心を立て。物の具衣類も脱捨。如一此法は捨ひ
て肩に分け。其者此衣服をも。同立ぬよりに泥に深て肌
に抱き出らせ。大小をば執に包て脊に負。包含非人の体

に身をやつし。夜此門彼の物にさしてて。一日此肌を
助かり。夜は宿たづれ或は橋此下に。譲譲がむりし物思
ひ法ぐけ。手苦乃労してたまか此日を送り。ゆうくと
お服を到りしは。御に出は安にして楽しさは是かや
云べし。夜にお服の御下。芭蕉が辻にて市右衛門といへる
は。動解由左衛門が乳母此史にて。則藤波半平が親
里。むかしは貴賤農業をもせしが。今は長波殿の恵分に
て。家屋敷居園を持ちれば。心安く志まに居にて當し
ちり。一人の悴は鎌倉にて長波に仕へられば。此御譲り
べき者なく。同所なる高家衆屋左衛門といへる者は。市右

清つ妹聟にて。お病といへる娘一人をもつるを。姪なれば
幼かより黄丸。市吉馬夫婦如在なく育上しに。みめかた
ち類なく。心ばへよで言語らしく。あ人のまゝ新風俗
なれば。凡十四の春より今年十七の秋まで。門に立る
る錦木。其数三千七百四十本余。日本国中の神々の数程
立しかど。あへて一本も立入ぬ様が。近所の笑ひ者とも意
の叶ぬを脱立。いかまもして他をあさんと。よりく相談
しけれども。城下なれバさのミ無法なるもならぬ。此
しも盆の時分なれば。定めて出ておどるべし。其時龍を
包袋誠うへて。引奪日比の意趣はたらさべし。是寛喜

の係ありと。名うてのあぶれ者ども。又六紫一味同心し
て。無夜心をるといへ共。涌るもおざれば。今は止を知れ
ど元弘三年七月十七日の夜半斗に。血手乃笑者以上七
人。市吉馬方へどやくと押かけ。戸を抑き破り内へ乱
入ば。家内の上下あるてぬるめく様。夜に紛りかしこに
経す。其深り手あきの者あ人。泣るめくおのゝをうしこ。
門口よりかけ出を様。新にふしたる乞食蔬むつをねて
庇かくり。ぬるり様なる様にはなるが。ぐのしもまゝとも
息も出ぞ。夫ともたゞ行ひより進く。お気ゝ者どもこゝろ
早くとこれさ一枝。さのミ強くも捜ぬ如なれ。清るとす

縁息絶しい。死の当身とぞ志る辺より。誰と二人御かいへうみ。縄よく呼べど家内は縛る辺。お露かけ辺持出る。細引にて殊数法なぎ。誰らを縦して又知り宛活の当身に息吹かへし。初て夏の気なるぞく。うろくを敷を内へ引込。市右衛門ならびに家内の者は縄を解どけば。皆く嬉しく。れもけ市右衛門お露かよろこび。手を合せて拝みながら。市右衛門法らく。ヤア おまへは勘解由と云 誠ハテサテ 親人おろん忘れなされしか。事平でござりまを。縁会は軍でやゝ後しいゆへ。嘸をれてくりまし。イヤ 拝ゐやそふと大事は悴を亦に並ると。けいこと

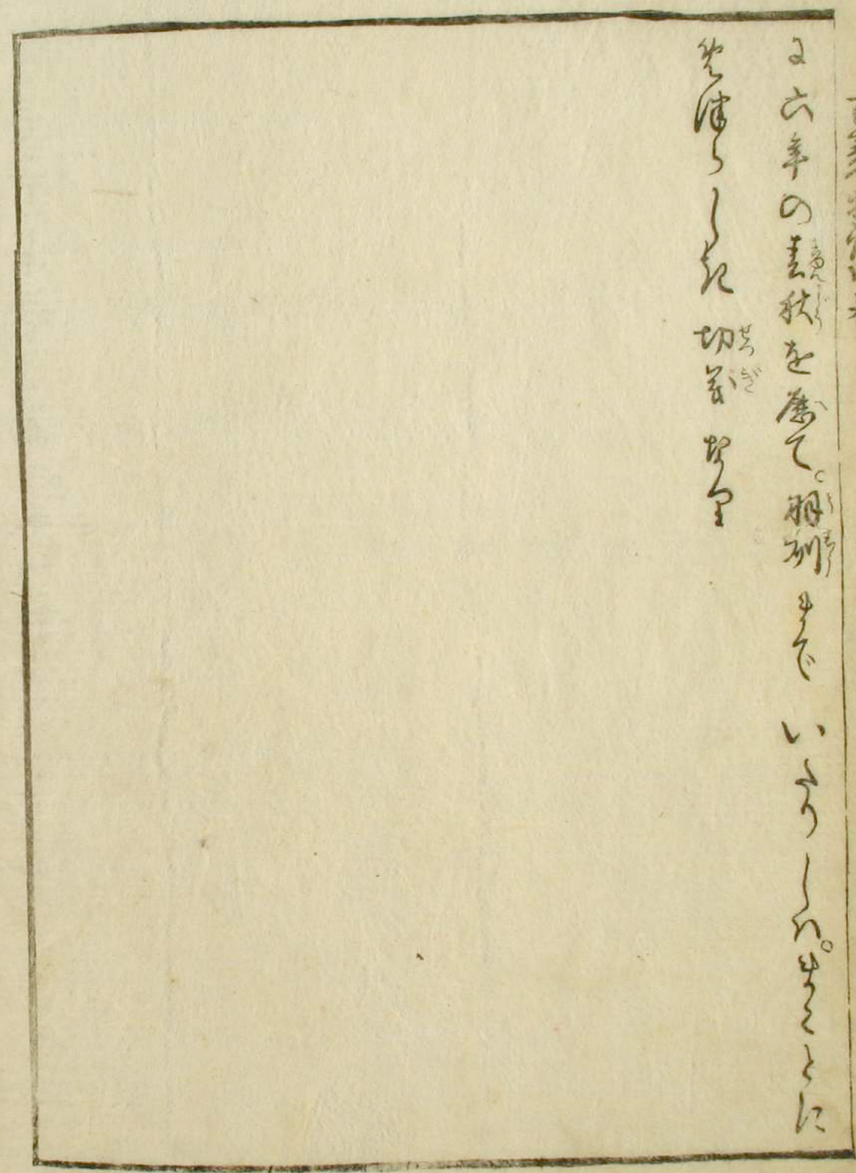
しや 亀青君綾羅の志と称引かへて 蔬の中にもやくと。お疾なりし御抱まいらせ。祝父指揮でござると。勿体なくも 猿へ渡せば。市右衛門子細をあらんと。やまり 祝子挨拶にて。扨くえし婦りで見忘れた。兄お露そちや 御で苦ふさ 知れまい。縁会は兄じや 近付に奴をさと。云に おかるは 誠と思ひ。恐行かれし母なの。縁会は兄がこちへ向れば。我なると 能女 志やと。老く おかしきゆつたが。扨は事平なでござりまたか。原理でこゝ 危場所。身に引かけて渡んにまあ。よい時にお帰りなされてお嬉しやと 家内もともに喜び いさゆへば。為 奏立て縛りしゆへ

らが。慶西段中知つたる事が。皆くを所て知る者を
京右衛門を見て。西国なぐに居うつむくを。是は誰じやと
かりふさ事や。皆知る所。定めて錦木を立さ志ゆつさ所
でござ候ら。あまり大勝也へ。どらくへどふもならぬお
捨て置ましさ。其暇立てござろう。其事や無理とも思ひ
ませぬと云へば。為奏。扨はあの門に其錦木の立をふる
をつまや哀一。無りて。盗賊の筋ではないか。たあらば皆く
其分ふして申しませふ。むしてと家内にも沙汰させま
すまい。志りしまてお出ハ此無用。今是は主のない娘な
れど。今よりは此事が女房なれば。今度ござると。此純

是に会議入孫がならぬと。其錦で首領志め上たる。縄を
かごきければ。皆く先者に聞て。こそくと申りけり。紀
して為奏。京右衛門を人なきにへ伴ひ。鎌倉落居の次第。其
平対死のことをくらしく語り。自殺の所存もあらし。粗け
れば。何が扨今日ケ様に彼て居るも。皆此事なれば。いか
でか廉略仕らん様なし。お心安ふ召せ。志りしそ程給ら
れし此数者を其給。いつまでも憚多なれど。悴事平と彼
意ければ。世間が廣ふ此度りませと。粗無数請合。更より喜
ふ娘。お渡ると一つにして。程なく女子を人出生す。おま
んと名を呼で。なるか此月日御送れど。誰なて知者なし。

世界は一ぱん変化して。ち後玉ちは殆れども。平人の和
さは。何乃さくりもなく。飛鳥君も飛古命と縦名して
隠く生長志ありひぬ。扨乃奏こと。半平と云名は呼べで。
皆人一チむをこゝくと呼ひり。そゆへは市右衛門ひとり
れ子と云ふよや。又笠量といて書がらといて。絵藝ちか
ら業まで。近所に誰おりぶ息子なりれば。むをこの中で
の一といふ人まで。市右衛門の夜の一チむをことゝなくし
か。むけ去れ風俗は。名を避るを行て出とそさいへる古
語かれば。半平様登てれこと助登し。扨大佛出拝ちれ
息女おせんの方は。ふかし絵倉れ別邊より。死も死

れを。母上と一処ようなこと有るべゆかり我使は。
方々流浪志ありしが。母上もそおどりまて。絵は元先
ありなくば。一所にもと我度れ知りられれども。肌身
はなきぬ算をおりひ出してい。命さへあらばさりとも。
今一度ぬり逢てもやとおりひ止まり伯母助人の元は
愛年月を送らしが。今は世の中祭り行て。高氏美貞
の家人。其外皮軍味方れ人々。高綱を賜つて。愛むし
かうりうが。付死自害せし人々れ。書や始の艶なる
をば。或はゆうりを求て引丸。或は仲達を入て黄うけ。又
は兵神に棄れて。妻となし。妾となし。いろくさはく



童
唄

古寒今抽絶

再板

五

臺唄 古実今物語巻之五

大仏姫君おせんの方の事乃来

やぬれまる温袍を衣て。狐貉が忌ける人と。立て恥ざるハ我れ由りとハ。子路ハ栄を貢ど恥とせずなる只心の潔白なる物を参ふ。おせん今ハ あさ浅しく中川も果むかしの面影ハ夏ちかりも浅ら初ども。六年以来の心ばらハ。中々夏夜清らかなまされ里。何なとも ハ隅屋よりぶれ。足ハ初ぐ あらぎれにまとても。妹背の中をば。見て雲まも さるしせず。心の潔白貞花なるみさがハ。かしも恥しからば。お方は寄しの芭蕉の辻高右の

福田文庫

と云しかど。今は市右ヱ門も[illegible]。市むをこ半平せそうと
咲て。扨は為奉ってやるらんと。仏嬉しくて。門口に立ち
一むそこ半平夜とゆらんに。おめにかゝりたしと云入也
ハ。下女ハ[illegible]深ぬ顔にて。奥に入りくと云へば。半平も更
に会奥行ず。立出て見るに。むかしとは雲泥万里の
形さる。おもひ付もせぬ。いかぬ人やらんは方にもひ事
ぞとあやしむ程。おせんは為奉の姿も忘れぞ。能付斗に
もひけれど。為奉ハとも忘れ様が。えより我身も知るさ
もぞ。ならいく見ゆへども。何身は見忘れかのやと再三
に及べども。清倉の内の字も云様が。更に事が付ぬいと

不審そうにぞ。彼の筆をも見出し。髪りさせは和て事が
付。扨は姫州の島女おせんかと。云んとせしがあらり此
人間。事が付て見れば成程面ざし。やつ也果しは憂艱
苦呼りしといふ事しさ見ゆるぞ。皆家ゆへと。おも
へばいとゞせきあへぬ。涙かくせばこなるは粗文忘しさ
庶しさなりしさやむことなきの縁におて。親はあやな
き横時為。抱さへ云れぬ風情にて。さしうつむけば如雪
お露。此神を見て奥より立お。三ツ子が見てもまゝ中
とは。知てもしらぬ親迄よく。是は〳〵主のおを付そふ
な。よふ社お祭なされましたと。やさしき何も耳にかく

里。扨ハあなたハ今ハお内儀さんかと。おろうとうたる
目れうちに。百万騎の強敵しも。埒れを取らぬ為奉なれ
ど。義理と情に心の苦しさ。けどられ度しと喰ぶしひし
てなるなど我ホが今の女房。さお房此女房ハ活念に
居た時。大分悪くなつた人の妹所。屋目になつて新人て
来られしとうへたり。人の誠ハこんな時。かくまふて進
ぜくたもと。粗むも一ツハ女房に心。垂度なきお房がに
こく。何が扨く。いつまでもなくしが。おうくまいト
まほ。先こなたへと奥へ伴ひ。飯よ風呂よと捨こくに
心をつけ。等閑にせぬもてなしハ。世界れなくなぬ

女房どもに。咄て喋うせたいくらひなり。為奏もお房が
恪宇せぞ。おとなしき心を感じ。さて又おせん見まんぐ
弱来る負苦と云。唯や今を憂苦労せし事ども弱度。
又ハ此地にて身を悪ぶこそ。止てなく妻様持し訳
をも。委しく咄度おりへども。心強せら新く程な様女房
に義理が出来て。云家べきかげもなく。おせんも又強や
うなる今ハ粘子。妻様も持ちなくなど。姦をも弱なりぬ
その恨めしく。雪外此年月の事ども。うさつらさをも語
り度。傾城の女ハ面隙など。狗に満ならう。お洗るが手前
ちうらなく打様待て。一日くと日を送る内。又年の毒

なることぞさん無りたり。此者志げらく公家一統の世と
なり。天下靜謐して。猶も謙念血肉の人々を。根を掘て
殺されしよ。入道の若君毛李反。生死の旋知也さるよし。
ハ知て幼少なれば。誰せんさくさる者もなかりしが。今
ハよりこゝ此人にもたべし。銀歡の末は。根を斷て葉をか
らすなりひ。諸國の守護地頭へ仰せて。詮議されれば。當國
にも無趣にて。所々に高札を立仰へ出さる者は此麼英
下さるべし。隠し置者は曲事たるべしと。お定りなる文
言。實や人の心は。事を付ると付ぬとが大事にて。何事も
なき内は。目の前にうさんに若見ても。何の事も付様也。

さあり様に高札も立。お觸も出と。何事なき者まで一味に
うたがひ合。せん所せん人は何如の生れで。あのまゝは
實のまではなひ掘と。へちまにもならぬことまで。浮ぶ
やき呼くは皆人のならいなり。志なるりおせん繋に
居たる筭。見る人ごとにうつくしきと誉賛も道理な
れ。所も相模入道殿の和此方。二位殿の筭。殊に奈ナ分に
長ぜし時の簑抽なれば。然らく日本にまたべからぬ。如子
ハ先此報にたやく目の付きのなれば。お虜兵衛り氣
に付て。おせん如鄭の指にまたる筭は。相も英数見ごとな
り。もとめなひしか。誉ひなひしかと問ける時。誉ひ

さると云ば。何人よりと。四られた時何と答へん。是ぞ如し
と云ハ何方までと。此ほんと思ひ給ればイヤ貴も買も
後さず。ちと子細ありてと斗答へ給ふ。後てかゝる人ごと
に笄の結構するを答て。貴しか買しかと弱時。これ弱
ハ如何に答しごとく。皆同じ無言なれば。交ハ嗔る
も○こなたの答たる笄ハ貴たか買たか勇しや。そら
いもせぬが買もせぬと嗔へり。去ハ皆人おせんが笄の
結構する様不実して。是幾分上々の所望なり。下
々の持べき物にあらず。何様隠念にて亡たる。愿く人の
ちからさぬならん。夫に付て思へば。一島子半年ハ幼

かより隠念にて育しと呼く。先を遣て家子とて連来り
し亀右衛。年頃と云ふれば見る程面指けたく。一体
態にして殊しからば。弱やお弱の方ならんか探知そ
めき法ぶやきしハ。うたてぬりたること共なり。家にお
弱が実父亀屋右衛門ハ。所の長とて人々重んじ恐
れ居り。此頃をハまだ。名主庄屋とて定里に頼家もなく。
唯所にて年古き人を。長と立て。年行の下役様法とも
させ居り右衛門所にて古き者なれば。町所の上大小
にならば支配し。若く年行所へ出入を。御手所年行よ
里右衛門を百され。そこでつて中後しなる所に祢の

筋に付。芭蕉が辻半平と云へ親者の悴。何とやらうたがはしきよし。辺ぢうに志らせる者を去ながら強援もなき雑説。百捕て詮議をべきにもあらぬ。汝心御付て実否ぬくべし。弥不審変筋ならば。又くゝ出べしとをかれば。たゞ此の畏て。半平と申者は別私聟にて明黄出入仕候。其幼少より強念に年公致し居りはへば。諸人の親ひもいはれ無事にては此程なく。其上小悴一人強念にて徳にたるよし。先年強念滅亡のみきり。急して立帰り。親方右の家督相続仕候へば。滅にいぶかしく存ぬ。何か心を付て窺ひ見るべし。弟に尚所にて徳は娘を人。是は

私実の孫にて此程はへば。強念より一れ来りは悴孫は弱の方ならば。幸と申は是は不仁ながら。私実の孫から家督相続仕ると申さ。陸分穿鑿はなきつゝ。いよく遣ひ此程なくは。首付て考へ申さん。其は麝香には。孫や娘めが不便に此程りまたれば。何に御崇り此事よふかり粗上ますと云はれば。年行もむに云はれ。神妙なる親跡のことは幸せをなす。夫れともとくと能吟味せよと申さる也。ハテ其こゝに如在は此程りませぬ。念に念を入まれと。交合て立帰りけり。乃養方には兼ねもけるを知らず。其夜夫婦并びにおせん。三人志て酒盛しけるが。お房



たより酒を吾通し。酒の和醉たる狂にて。お後もまつ
れ礼して麻れれば。能打うらと為奏。おせんを河の弓へ
伴ひ。今まで咄度事ども。お病が手おを悔りしまり。此事
もさぞならんと。越方此を尤咄し。且お伴るいけ家の君
子姫なれば。業に打祝ばならぬ訳。全く忍よふならば。只
兎も角も。亀事会乃此仙長様。伝神に行るだろう
ありと。細ぐと語へられば。おせんも今まで猶に一だ
い成しを尤。打明て語会以某此難儀。法国を出りての
銭の女皇公中く皆もおそろしき変ども。まで有し
られば。為奏も洞を示がし。誰あふ語会度の此一門にて



も一ヶ二と指折ゆる。大佛お相手の姫君玉簾の中に表
れ綾羅錦繡に包まれ紙袖にも粉百の従者付添し身
が見しきやさ又のなんまてして六年以来の雛の苦行
おもひきらしていたりしと。悲歎の涙にくれければお
せんはいとし泣しみ泣きたのさまくが所身とてもお
なじる。猿念の執事職長嫁三所左衛門柘の兄成しお姿
は何ぞぞまぞ丈ようは亀家君忘ひおせば積の程と
手にむかし思ひ出て志ぎり出ちくりし手折ゆる。女房お
露目を見せし。次の座紙さらなと明。くるりと六年に血
ちしる眼ゆるり細白眼で泣まめ紀。よみもしまらい

我病せて始まり来りしかり。そ称さましや様に今
まで家病に従ひ毎夜くしけ通りか。こと口情や何とせん
とせきよく悩みくどけば。ふたりも何とせん方なく。
女くにまざめても。女に耳にも吹入ず。俗に女は性
切と。いたりて強く脇立時は唯従ばかりにて理屈も別
らに継があつかいでも学び社。とふく様にをんかの。
其夜実父太傅の方へ帰りしは。相も年は毒なるまなり。
夜を喝に○市太傅のどんの一むをこと女房がないて里ん
年をする○と喝ふは此所如べし。女房がないとてと。との
字を入れて喝ふは子丑の誤りなり。乃奏もあきれ果て。

同此の事質に似合ぬ。もしさなき振舞さをがい賤しき
志ぜと見うぎりしがと。其分にも推量せどむかい御を
しられ先。いかなる御し様が。此上はとて推量ける如に。
一夜御使て覚古の事。一ト通りの挨拶にして。相始
詰るといかなる訳か。時を見異ゆ始に申ば。ふく止めく
どもも是非ともと申は付。やむことを切ぞ今日来ばは。三ヶ
年を申女に来る。是までの縁でがな所詮ふと。いとど
志りんざ偏屈親父。うづり切て云出せば。乃奏ぐ何とし
て。起じて妻となり夫と成るうりそれにまゝあるぞ。
六年がなれ志るしみ。あまでを申ば。おしのいきどが

つる 郭公 へ りぐら。そこ 啼 (な) くと 聞 (き) て 我 (わ) れと いえども 飛 (と) び 来 (く) る 人 (ひと) の 心 (こころ) 入 (い) れ 聞 (き) かれ ぬ のみ 入 (い) れて 聞 (き) かれ ぬ 時 (とき) は 啼 (な) くとも

し拔いて續ば
悔りおしくゆへども。あまて一年り中よりし。抑
ならい。かくるゆゑとも知まいらせざして。此年月
心安く別除りしる。誠に勿祈なく存まいらせ下。
此身の經念よりぞしてかりしまいる龜を命は
此度此弱の龜家君にてやあらんと。人々此噂に
のり。ひそうに此事所へ申つるまゝよりまて。又
たゞ當つ名出され。とくと吟味後べき旨仰渡され
ては。夫につき又たゞ事つまいりは申ゆへ。心を付
て氣ひなれ。係其此方さ用に出きれなくは。知そう

は家に志しそべしこそ方ならびに半年さあ無くは
深ふ生じ。若かよりる能れては。家所家に及べうら
すと。呉く申されは。是て心を存つれ粗母父の年
賀なれば。ほざとは行酒を通し。能麻入たるかりは
て。おふうなる所拘絡。一般始終殊らすうけなり
めし。中うもおせんなる所すは。当所先の所地に。大
佛殿の姫君とうけなり。驚入まいらせは。むりし此
此代にてまいまさば。ならいどき殊しき志辭みを
るとも成まいきに。お心安く申せしる。いらふ志り
まいらせ様だとて。さりとも思れ多く。悔りおしく

なきいらせは。かく新やぐとなきけ方此廿年月の
愛け苦労。唯やさぞとけいたるしく。新にてひせび
入まゐらせは

一 千夜あらしもなひこと中。又乃方へ来りしを。唯
やけにくしみ思しをさん。一日の情にさへ百とせ
の命情なぬならひ。偽して所身と別深て。そや六と
せり及まいらせは。あまり逆なるをとも。なぐ恨
をうべきや。そうへ是まで家ぞりも。恨をなるを
なく。けれ恩量と云所才智と云。何に一つ乃不足なく。奴
ばらが我身にハ。御にさへ更なりと。おくお

もひまひらせし社所理なれから新所屋くにて
おもしまれをの様。去ばいとおしくなまいらせる
事ハ。一子に百倍もなれがこなく思ひまいらせる
度ハ身様そう新くに増らん。去ながら姫君おせん
ぬ乃。切なるお志。義理と云矢先に折て。俗ぬもなれ
を残りしく。あまりさへ心にもぬ。さがなきを
たゞ上。是を孫に見ならぬ。所様姫様様ドりし。唯
やさぞお二方ともに不屈なる女。さそがハ妹しき
者と。おさみしみ思しをさん。全く不なのかなれ
ば。我をみも所ゆるし新さりし。只くいとおしさ

一

亀まろ。ふたつ。父がきみをおぼえ尾張へ下りしと母ぎみをおもふとて。ひとりもねざりけり。

ふたつとせまれ。おもかげあくまでおぼえてありさうにて。

あまもろこしの事ども。折ふしにつけてかたりきかせ。ひむかしくろうそだてたまひしが。後に池しくれ北の方の御ぼうとなりしが。いたつてもの思ひのふかき人にて。おしへもげにしかりしが。折ふしは琴をとりいだし。ひとりごとのやうにかなでゐたまひしが。ふしぎにおぼえて。

琴のねにあはれをそふるしらべかな

とよみたまひしが。ほどなくうせたまひぬ

と漕ぎ寄るも動解由あるが不便さに跡より漕ぎ寄せ乗り移らんとするを船頭ども声を揃へて「ヤイ〳〵乞食の分際で船に乗らうとは不届千万。サア〳〵早く岸へ上がれ」と罵れば「ハテ情ない事を言ふ船頭殿。我々は乞食ではない。これ〳〵この通り立派な侍。ちと訳あつて今は斯様な姿に成つて居るが元は二本差した侍。どうぞ乗せて下さい」と言ふを聞いて船頭ども「ハテ嘘を言ふな。侍ならば何か証拠を見せろ」と言ふに「ムヽ成程証拠を見せろとは尤もの事。ソレ〳〵この通り」と懐中より取り出だしたるは一通の書状。「ハテ何だ」と船頭ども受け取つて見れば「ヤア〳〵これは〳〵お侍様とは存じませんでお見苦しい所をお目にかけました。サア〳〵どうぞ此方へ」と言ふ声を聞いて

けるゝ申ましたる。其平は然るさりませ。扨又おせんなと
申れ。先は明主大佛なれ。娘若くてまゝらせあふらし
私風情乃去ませでも。は明内は今日を送りしれ。皆あるこ
れは是をまゝや此主人もおなし事。娘が得り此相手鉢
らずとなし。離別れましたい時をえましたいと申ます
故。娘なぐらもおりしおれ。ういゆゑと参まして。其所
は有は服を申文ましては誰ります。けよれ誰ならぐ
をなく。おせんなと此文姫中聴く。宋長ふお菓く捨て
よふると。なるる付ても。亀寿君れ此ゆゑ。まさよう所人をつ
て。苦捕らるゝ日ふれ。多非悔くても得りませぬ由く。娘

と相談いたし。姫様の此安堵れ為お使なぐら孫とゆり
悔りなれど。こゝやさらしまて扨て付をのおおなれは此
孫が切出てきれば。こちの自由に致さて。お呼りなされて
かさりますな。亀寿様は勿論手尾に付てお二方なへも
どふお案りが無ふも知ませ。孫とおせんが死ましたで
つかりで。さりまりと絶の事をのまいよふに致しまし
て此程りまた。けよれもちやお心無なく。亀寿なをは守
立捨りしませ。併しお名をもお姿をも。今よりおせんと
なされませと。強る方なき親父が嵩実為奏も感涙をな
りしさりとそれお寿と云。手を云。詞に云はれぬ恥りしき

心底けなけれも糸なる。手心とは志らに。離れ状出て今
ての後悔。兄は反古にして戻して貰ひたいと云へば。お
せんは粗又義理と云。兄非くえの無りに。呼戻さねば
ふけうらが立ませぬと。出家見へし挨拶に。左右の首
を下げ。冥加もないお羽戸叩せたら呼を雑なませふ。併
しけるが菩提の為爲心の所なまて此程りまもれば。此と
の所はいかゞに為まする。先がれが親にまうせ。いかゝに
せおまんがなきうらを見ず。中さんと為養給ともちふ
送り給ふ。後に退去し。扨お爲す。兄非は呼ぬさんと
をくに中送りぬ迄ど。終に泣らず。みづから變我切を

而加尼寺へ行て。さみをかへ。永くおまんが菩提をしも
らいけるとなん。為養日比情けふかく。慈悲あつき者な
迄ば。古仕の下女下男までも。此事亦へあらさだ。なんな
く毛家君我守立成長此後。志ちらく関東我奥歴して天
下の大軍を起し。中せんざいの乃大将に。相掩次第時行と
名家なられしは。此家君のことなり。手後綜会此笈順委氏
と和睦なて。経見玉を能し。再び北東家を立られしは兄
併。為養が生を全ふしたる右衛。此にて関東公にもお
とるまじ。去ば為養は勿論。おせんと為の名をもて。憂歎
難せし貞吾と云。左右衛門の孫を敬して。先主此思辞

への実義取りけれ病が夫を大切におもふ心から、血を
りけさ姫を身替りに立。又おせん女蕃の。さしも生きる身
を捨て。乃奏我弱志されし切義我感じて。徒ぬ夫に
とられ。再び得らぬ心底。又をましき四人の人く。唄ふ
作りて称賞せしも微にことわり如何

寶暦十一辛巳正月吉日

安永八己亥正月再版

東都書肆

松屋庄吉

竹川藤兵衛

筆者 禾山県峨

福田文庫

入ラハ
ツイナコム
ウリリウ